

市原市六孫王原遺跡G区

2016

ひらい不動産販売株式会社
市原市教育委員会

ろくそんのうぼら
市原市六孫王原遺跡G区

2016

ひらい不動産販売株式会社
市原市教育委員会

例 言

- 1 本書は、千葉県市原市姉崎字六孫王原3233番1の一部に所在する六孫王原遺跡G区の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理作業・報告書刊行は、市原市教育委員会生涯学習部ふるさと文化課埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査は以下のとおり行った。なお、所在地などの諸情報は巻末の報告書抄録に記載した。
本調査1,137㎡（調査コード セ535）調査期間：平成27年4月27日～6月30日 担当 近藤 敏
- 4 整理・原稿執筆・編集は田中清美が担当し、挿図作成の一部について近藤が協力した。
- 5 本書内の遺構実測には、公共座標値(平面直角座標第IX系)を使用している。
- 6 遺物の詳細内容については、第3表土器等観察表及び第4表鉄製品・石製品観察表で説明した。

本文目次

表目次

1 調査に至る経緯	1	第1表 遺構名(番号)新旧対照表	3
2 調査遺跡の位置	1	第2表 挿図掲載外の遺物量	27
3 調査の成果	4	第3表 土器等観察表	30
4 まとめ	27	第4表 鉄製品・石製品観察表	32

挿図目次

第1図 調査遺跡の位置	1
第2図 六孫王原遺跡調査全体図	2
第3図 六孫王原遺跡G区遺構全体図	3
第4図 1～9号遺構実測図及び出土遺物実測図	5
第5図 10号遺構実測図及び出土遺物実測図	7
第6図 11号遺構実測図及び出土遺物実測図	8
第7図 11号遺構出土遺物実測図	9
第8図 12号遺構実測図	9
第9図 12号遺構出土遺物実測図	10
第10図 13号遺構実測図	11
第11図 13号遺構実測図(合成)及び出土遺物実測図	12
第12図 14・15号遺構実測図(1)	13
第13図 14・15号遺構実測図(2)	14
第14図 14号遺構出土遺物実測図(1)	15
第15図 14号遺構出土遺物実測図(2)	16
第16図 15号遺構出土遺物実測図	16

第17図	14・15号遺構一括出土遺物及び縄文土器実測図	17
第18図	16～19号遺構実測図	19
第19図	20～23号遺構実測図及び16号遺構出土遺物実測図	20
第20図	17・18・21号遺構出土遺物実測図	21
第21図	24号遺構実測図	22
第22図	24号遺構出土遺物実測図	23
第23図	25号遺構実測図(1)	24
第24図	25号遺構実測図(2)	25
第25図	25号遺構実測図及び出土遺物実測図	26
第26図	その他一括出土遺物実測図	26

図 版 目 次

PL. 1	遺跡遠景、調査前の状況、調査状況 1・2号遺構	PL. 9	14・17・18・21・24号遺構出土遺物 14・15号遺構一括 その他一括出土遺物
PL. 2	3～12号遺構	PL. 10	1～3・5・7・8・10～13号遺構出土遺物
PL. 3	13～15号遺構	PL. 11	14・15号遺構出土遺物 14・15号遺構一括及び縄文土器
PL. 4	14～17号遺構	PL. 12	14・15号遺構一括及び縄文土器 16・17号遺構出土遺物
PL. 5	16～19号遺構	PL. 13	17・18・21・24・25号遺構・その他一括 出土遺物
PL. 6	20～24号遺構		
PL. 7	13・15・24・25号遺構		
PL. 8	11・14号遺構出土遺物		

1 調査に至る経緯

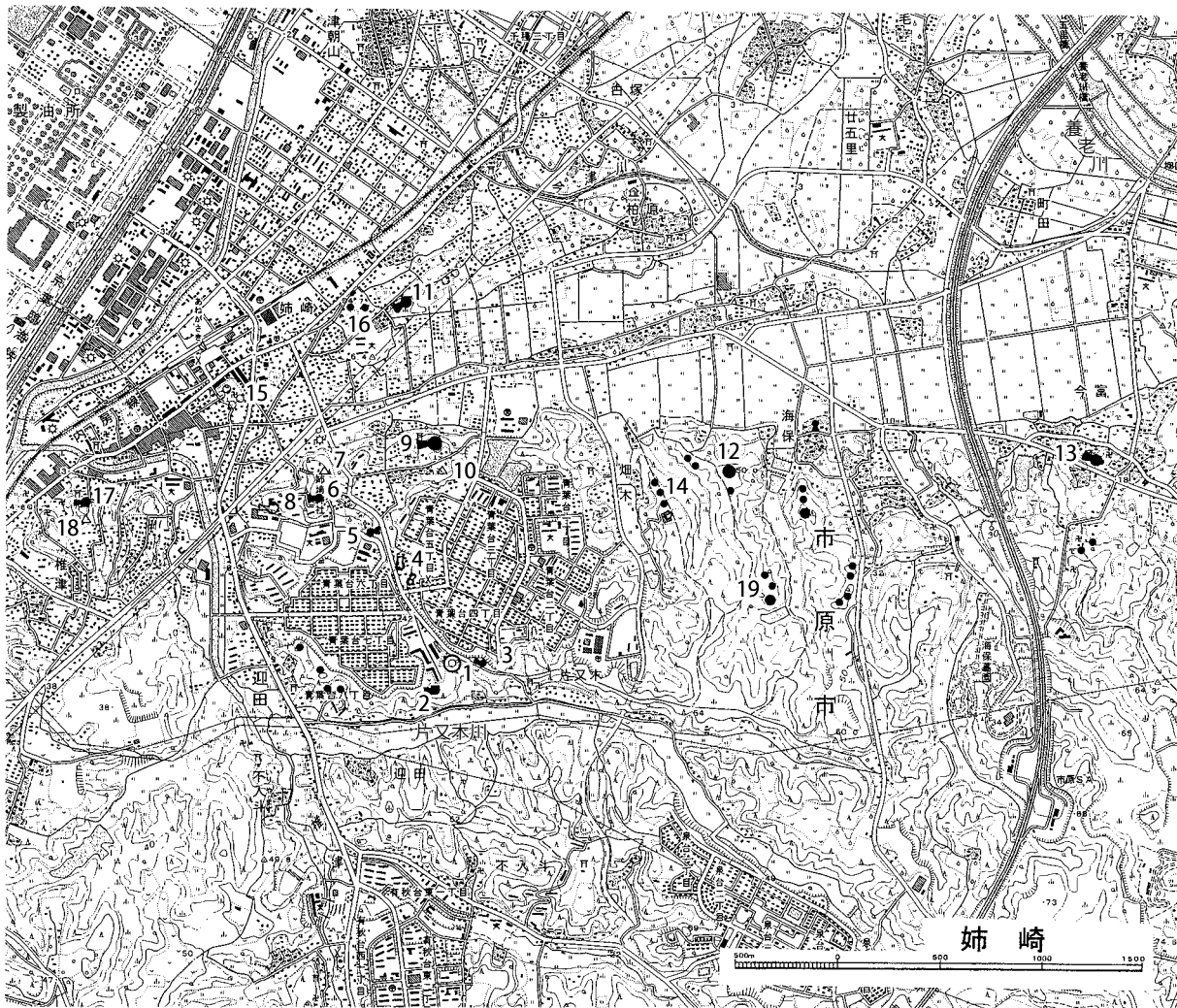
今回の発掘調査は、千葉県市原市姉崎字六孫王原3233番1の一部における宅地造成工事に伴い実施したものである。

ひらい不動産販売株式会社は、工事に先行して、平成26年10月1日付けで、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」を千葉県教育委員会教育長及び市原市教育委員会教育長宛に提出した。

届出を受けて市原市教育委員会が試掘を実施した結果、遺構と遺物が検出されたため、事業範囲の内2,630.37㎡を対象に、市原市教育委員会が国庫補助事業として確認調査を行った。

確認調査の結果に基づき、ひらい不動産販売株式会社と千葉県教育委員会及び市原市教育委員会との協議を行い、現状保存が困難な工事範囲1,137㎡を対象として今回の本調査を実施することになった。

2 調査遺跡の位置

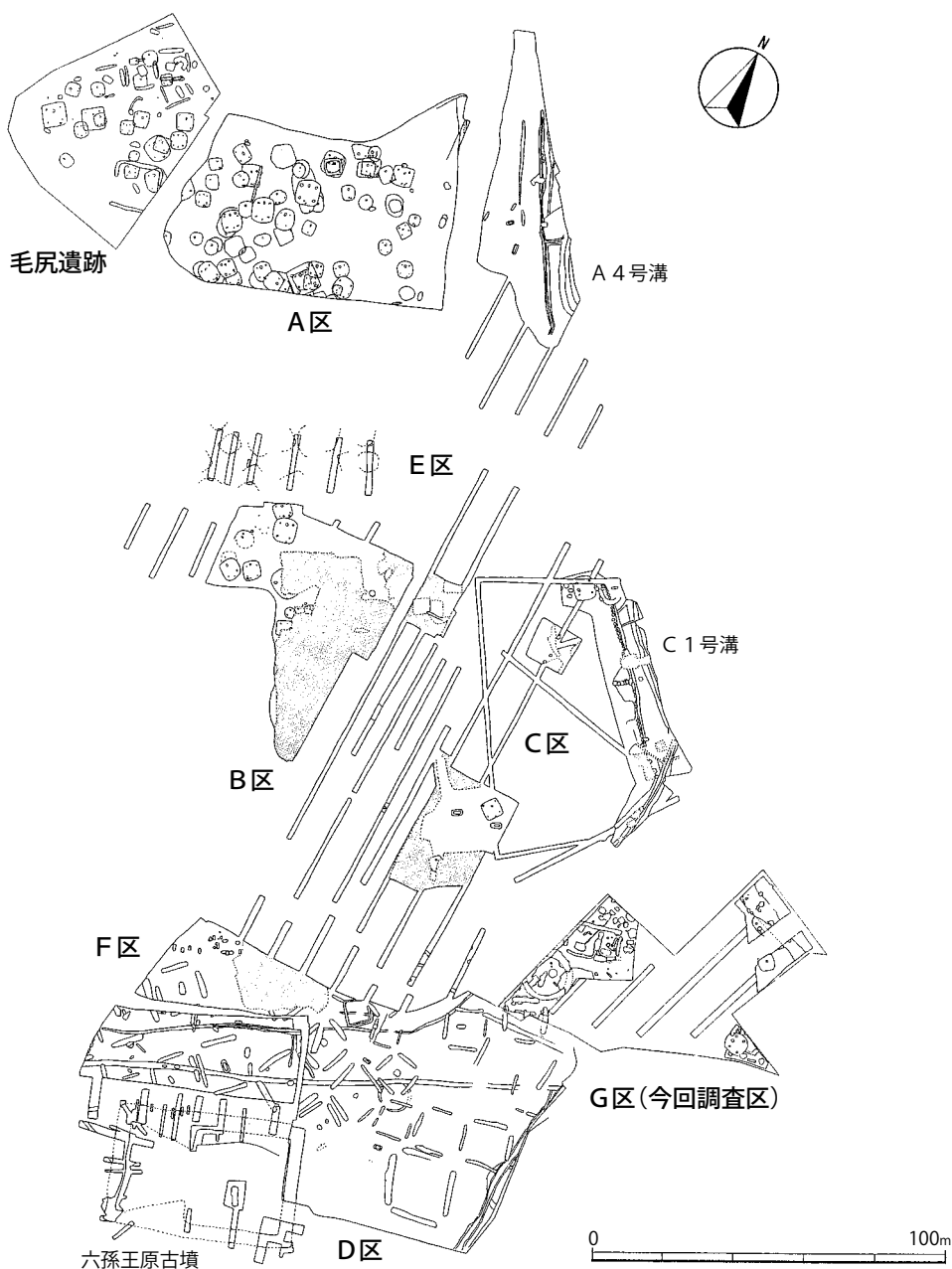


第1図 調査遺跡の位置

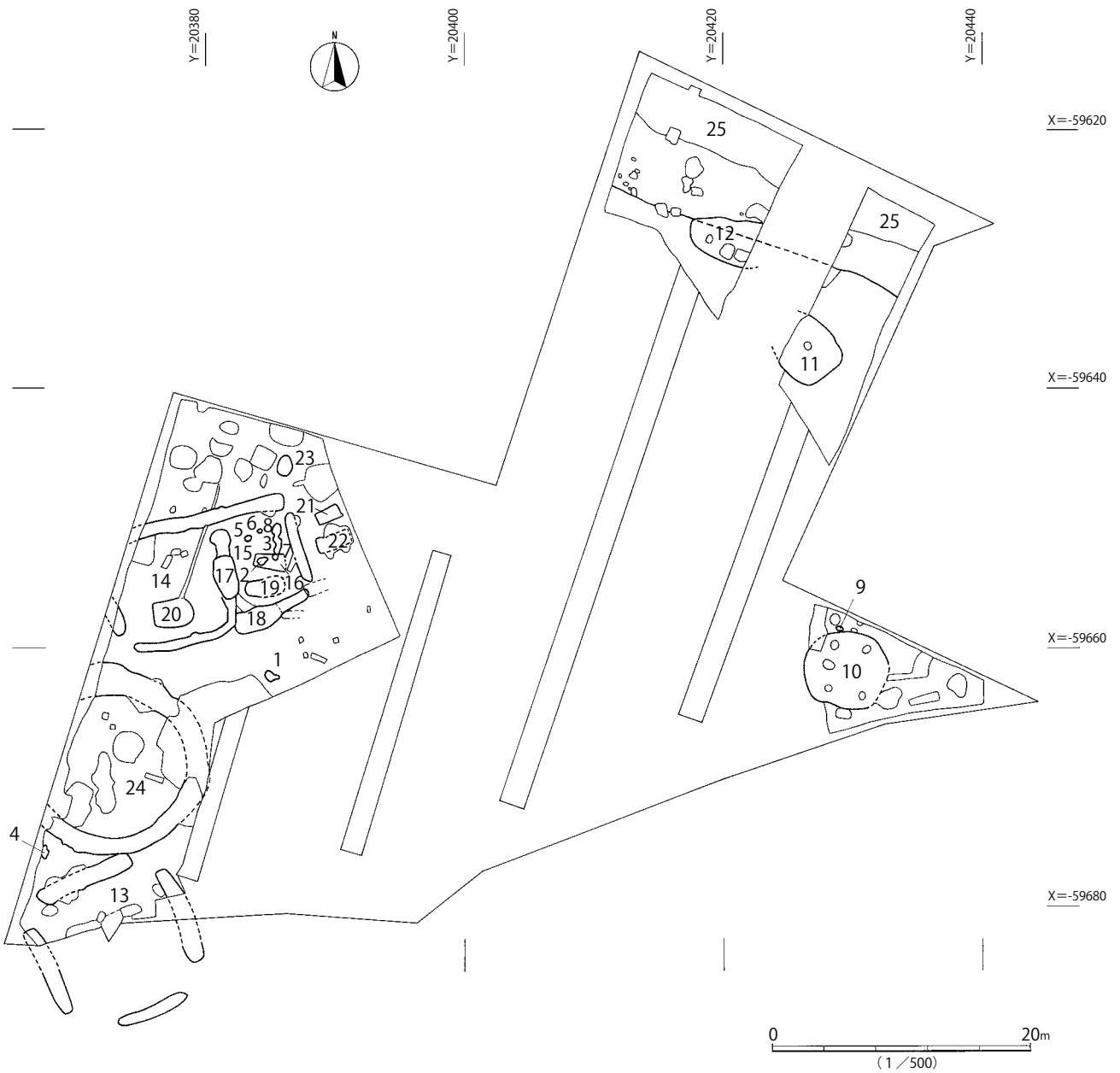
- 1 六孫王原遺跡 2 六孫王原古墳 3 堰頭古墳 4 原1号墳(原遺跡) 5 鶴窪古墳 6 釈迦山古墳 7 姉崎宮山遺跡
- 8 山王山古墳 9 姉崎天神山古墳 10 姉崎東原遺跡 11 二子塚古墳 12 海保大塚古墳 13 今富塚山古墳
- 14 畑木古墳群 15 妙経寺古墳群 16 上野合遺跡 17 外郭古墳 18 茶ノ木遺跡 19 海保大塚遺跡

六孫王原遺跡は、東京湾旧汀線から南東に約2.4km入った椎津川と養老川間の台地上に位置する。標高は約47mを測る。当台地の南側には、椎津川支流片又木川の小谷が存在する。当遺跡は、マンション建設に伴う調査が昭和63年以降から5回行われており、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡や方形周溝墓群などが検出されている。また、遺跡内の南側には横穴式石室を検出した全長約45mの前方後方墳である六孫王原古墳(市指定)、東側には前方後円墳の堰頭古墳が存在する。今回の調査区は、遺跡の北東側にあたる。

当遺跡に隣接する毛尻遺跡や北西側の原遺跡では、弥生時代の竪穴建物跡や方形周溝墓が調査されている。付近の主な古墳は、当遺跡の北西側約0.5kmに原1号墳(消滅)、同じく約0.7kmに下総型円筒埴輪を検出した鶴窪古墳(市指定)、同1kmに粘土槲が確認された釈迦山古墳と銀装環頭大刀や胡籥などを出土した山王山古墳(消滅)、北側約1kmに全長約130mの前期古墳と見られる姉崎天神山古墳(県指定)、



第2図 六孫王原遺跡調査全体図



第3図 六孫王原遺跡G区遺構全体図

第1表 遺構名(番号)新旧対照表

No	本書記載名	現場使用名	種類	時期	備考	No	本書記載名	現場使用名	種類	時期	備考
1	1	8	炉穴	縄文早期		14	14	11	方形周溝墓	弥生	
2	2	9	炉穴	縄文早期		15	15	7	方形周溝墓	弥生	
3	3	10	炉穴	縄文早期		16	16	7-1	土壇墓	弥生	
4	4	未	炉穴	縄文早期	現場名5号の南	17	17	7-2	土壇墓	弥生	
5	5	12	炉穴	縄文早期		18	18	7-3	土壇墓	弥生	
6	6	13	炉穴	縄文早期		19	19	7-4	土壇墓	弥生	
7	7	未	炉穴	縄文早期	現場名10号の南	20	20	11-1	土壇墓	弥生	
8	8	未	炉穴	縄文早期	現場名10号の北	21	21	14	土壇墓	弥生	
9	9	未	炉穴	縄文早期	現場名3号の北	22	22	15	土壇墓	弥生	
10	10	3	竪穴建物跡	弥生		23	23	16	土坑	弥生	
11	11	4	竪穴建物跡	弥生		24	24	5	円墳	古墳	
12	12	6	竪穴建物跡	弥生		25	25	1	道路状遺構	中世	
13	13	2	方形周溝墓	弥生	市遺跡分布図339-5						

北側約1.8kmの砂堆上に石枕(国指定)や銀製耳飾などを出土した全長110mの二子塚古墳(県指定)などが存在し、上海上国造の奥津城といわれる姉崎古墳群を構成する。古墳の時期としては、姉崎天神山古墳・釈迦山古墳が前期、二子塚古墳が中期、山王山古墳・原1号墳・鶴窪古墳が後期、六孫王原古墳が終末期と考えられ、前期から終末期までほぼ連続して古墳が構築されている。特に前期古墳は、房総の同時期の古墳群の中でも最大規模を誇っている(第1図)。

3 調査の成果

(1) 調査概要

今回の調査は、確認調査の結果を受けて実施したG区1,137㎡の本調査である。本調査範囲は4か所に分かれている(第3図)。調査前の現地は畑地、山林及び荒地であった。測量基準点は座標値(日本測地系)を使用した。水準点については近隣の既知点より求めた。表土は重機により除去し、遺構プランを確認した。調査は当区に隣接するB・C・D区で検出された遺構との繋がりを想定して進めた。遺構の保存状況は、昭和40年代に建設されたボーリング場などによる掘削部分や木の根の掘り返し部分が見られた以外は比較的良好で、当地域の標準層が残っており、多数の遺構が検出された(第3図)。

(2) 遺構と遺物

炉穴

1号遺構(第4図、PL.1)は、調査区の南西側やや中央寄りに位置し、15号遺構から南側に3.20m離れている。形体は瓢箪形で、遺構プランの西側に焼土が厚く堆積する。規模は長軸1.25m、短軸0.80m、深さ0.07m、主軸方位はN-87°-Wである。出土遺物(第4図、PL.10)1は、縄文早期後半の条痕文系深鉢胴部片1点のみで、焼土内からの出土である。

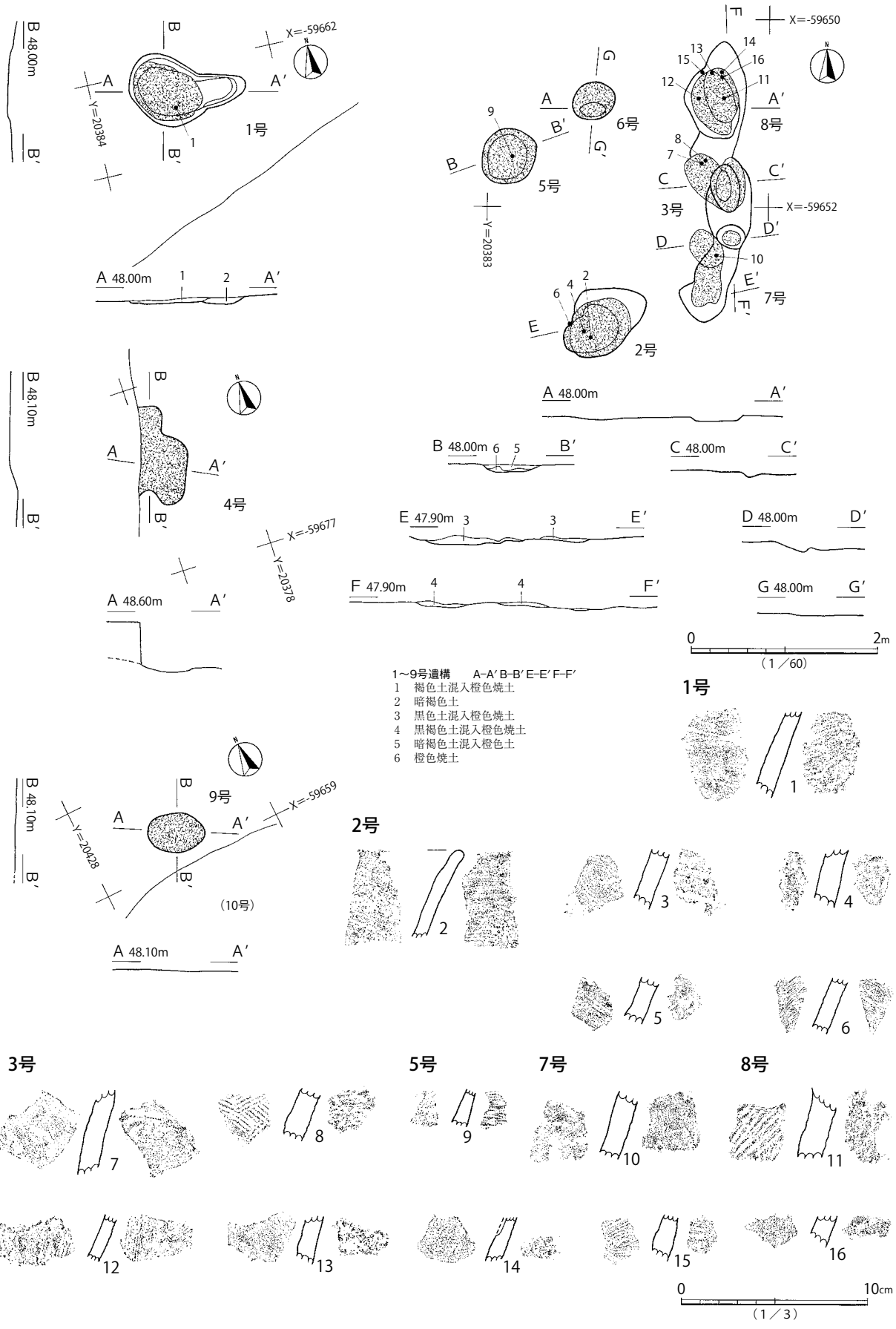
2号遺構(第4図、PL.1)は、調査区の南西側に位置し、15号遺構のプラン内にあり、上部を16号遺構に切られている。形体は不整形円で、焼土が遺構プランの南西側に堆積する。規模は長軸1.00m、短軸0.70m、深さ0.10m、主軸方位はN-60°-Eである。出土遺物(第4図、PL.10)2~6は、縄文早期後半の条痕文系の深鉢片で、2は口縁部、3~6は胴部片で2・4・6は、焼土内からの出土である。

3号遺構(第4図、PL.2)は、調査区の南西側に位置し、15号遺構のプラン内にあり、南側に7号遺構、北側に8号遺構が連なるように重複している。形体は不整形で焼土が存在する。深さは0.05mである。出土遺物(第4図、PL.10)7・8は、縄文早期後半の条痕文系の深鉢胴部片2点で、焼土内からの出土である。

4号遺構(第4図、PL.2)は、調査区の南西側に位置し、24号遺構から南西に1.20m離れて存在する。遺構プランの東側部分のみの調査である。形体は焼土の範囲のみで不整形を呈する。規模は長軸1.10m、短軸0.50m、深さ0.10m、主軸方位はN-5°-Wである。出土遺物は皆無である。

5号遺構(第4図、PL.2)は、調査区の南西側に位置し、15号遺構のプラン内にあり、北東側0.50mに6号遺構、南東側1.35mに2号遺構が存在する。形体はほぼ円形で焼土が内側に堆積する。規模は長軸0.58m、短軸0.55m、深さ0.08m、主軸方位はN-1°-Wである。出土遺物(第4図、PL.10)9は、縄文早期後半の条痕文系の深鉢胴部片1点のみで焼土内からの出土である。

6号遺構(第4図、PL.2)は、調査区の南西側で15号遺構の内側に位置し、南西側0.50mに5号遺構、東側0.75mに8号遺構が存在する。形体はほぼ円形で焼土が全体に存在する。規模は長軸0.45m、短軸



第4図 1~9号遺構実測図及び出土遺物実測図

0.40m、深さ0.05m、主軸方位はN-5°-Eである。出土遺物は皆無である。

7号遺構(第4図、PL. 2)は、調査区の南西側に位置し、15号遺構のプラン内にある。北側で3号遺構と重複し、南西側0.30mに2号遺構が存在する。形体は不整形で焼土が存在し、深さは0.07mである。出土遺物(第4図、PL. 10)10は、縄文早期後半の条痕文系の深鉢胴部片1点のみで焼土内からの出土である。

8号遺構(第4図、PL. 2)は、調査区の南西側に位置し、15号遺構のプラン内にあり、南側で3号遺構と重複し、西側0.75mに6号遺構が存在する。形体は不整形で焼土が存在し、深さは0.05mである。出土遺物(第4図、PL. 10)11~16は、縄文早期後半の条痕文系の深鉢胴部片で、すべて焼土内からの出土である。

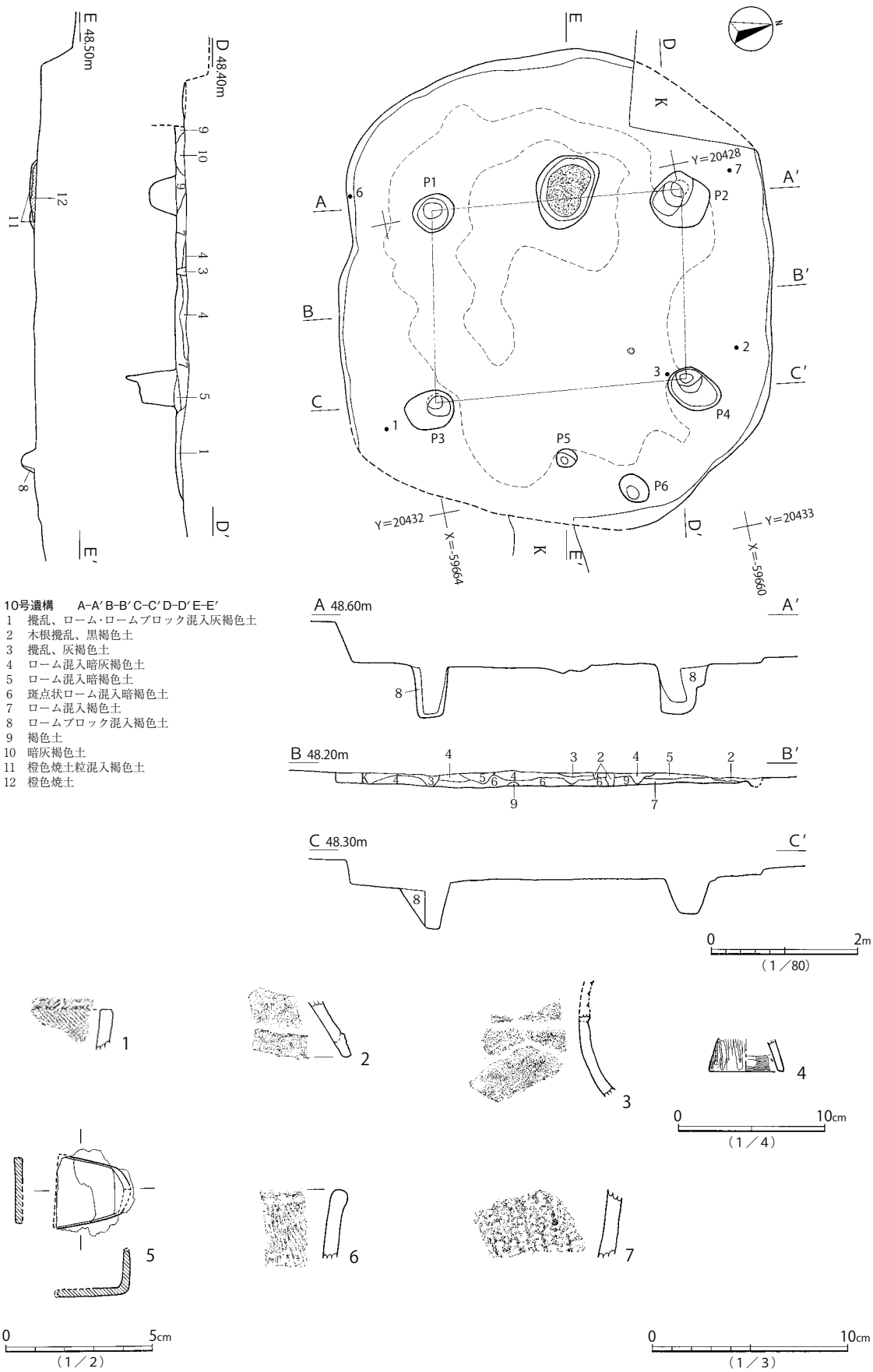
9号遺構(第4図、PL. 2)は、調査区の東側に位置し、10号遺構の北側0.15mに近接する。形体は長円形で焼土が薄く存在する。規模は長軸0.60m、短軸0.40m、深さ0.03m、主軸方位はN-60°-Wである。出土遺物は皆無である。

竪穴建物跡

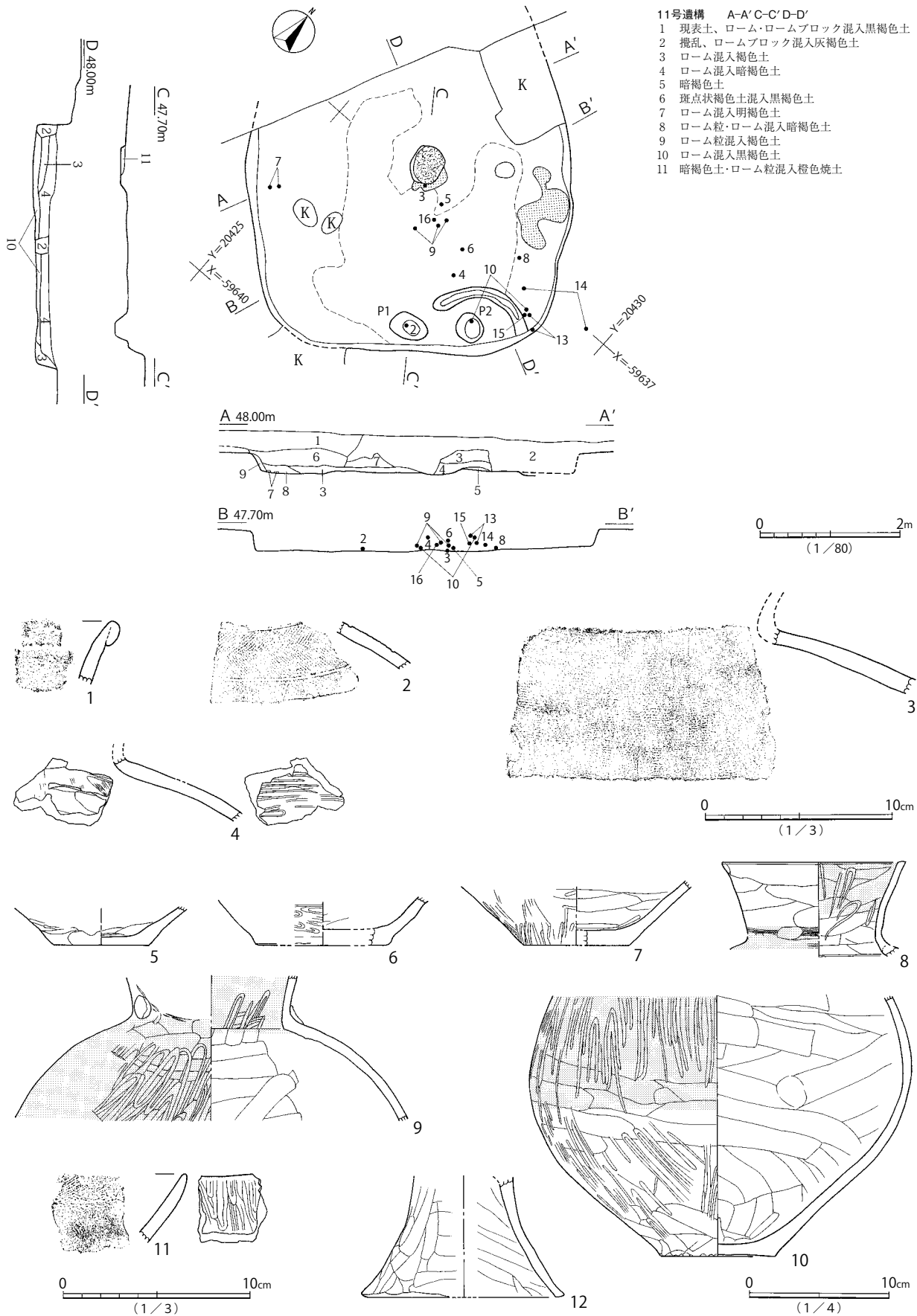
10号遺構(第5図、PL. 2)は、調査区の東側に位置し、形体は長円形で、北西側と東側に攪乱土坑が入る。遺構プラン全体上部がやや削平されており、特に北側と東側が顕著であった。規模は長軸6.42m、短軸5.92m、深さ0.88m、主軸方位はN-78°-Wである。床面中央付近に硬質面を確認できる。炉は長軸線上のP1とP2間に存在する。大きさは長軸1.04m、短軸0.78m、深さ0.12mで焼土が厚く堆積している。壁溝は認められない。支柱穴は4本で深さは、P1が0.76m、P2が0.63m、P3が0.62m、P4が0.48mである。P2は立ち上がりが斜めで床面の中央方向を向いている。P5は深さ0.19mで梯子ピット、P6は深さ0.14mで貯蔵穴とみられる。竪穴の覆土は、ローム混入褐色土を主体とした自然堆積とみられる。出土遺物(第5図、PL. 10)1は、弥生土器椀口縁部片、2は高杯の脚部片である。3は甕胴部片、4は小型台付甕の台部片、5は板状不明鉄片で平面五角形の三角形部分が直角に折り曲げられている。6・7は早期の縄文土器片である。1~3は覆土下層、4・5も覆土からの出土である。

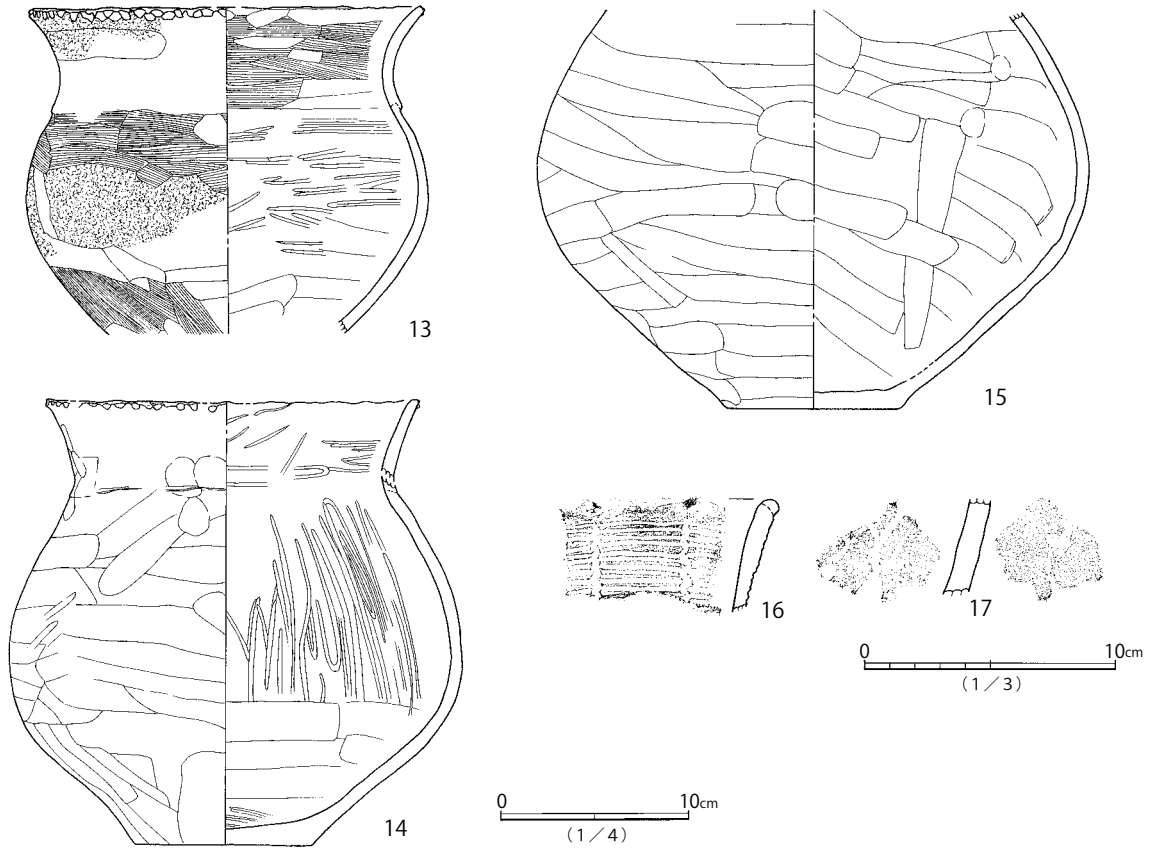
11号遺構(第6図、PL. 2)は、調査区の北側やや東寄りに位置し、遺構プラン北西側の一部が未掘である。攪乱が北側や床面に見られる。12号遺構が北西に6.00m離れて存在する。形体は胴張りの隅丸方形と推定される。検出規模は長軸4.60m、短軸4.38m、深さ0.60m、主軸方位N-41°-Wである。周溝は認められない。床面中央付近南側に硬質面を確認できる。炉は床面のほぼ中央付近に存在し、やや長円形で大きさは長軸0.57m、短軸0.43m、深さ0.10m、焼土が厚く堆積する。ピットは、P1が深さ0.20mの梯子ピット、P2は深さ0.30mを測る貯蔵穴で、北側床面には幅0.12m前後、高さ0.04mの周堤帯がある。竪穴の覆土はローム混入暗褐色土を主体とした自然堆積である。遺構プランの北側から床面中央部に向って遺物の流れ込みが見られる。出土遺物(第6・7図、PL. 8・10)1は、弥生土器壺口縁部片、2は壺胴部片、3・4は甕胴上部片、5~10は壺、11は椀口縁部片、12は台付甕台部片である。13~15は弥生土器甕である。16・17は縄文土器片である。2はP1覆土上層、3・5・7・8は床面付近、4・6・9・10・13~16は覆土下層、他は覆土からの出土である。

12号遺構(第8図、PL. 2)は、調査区の北側中央付近に位置し、11号遺構が南東に6.00m離れて存在する。形体は長円形に近く、いわゆる小判形である。東側の一部は未掘で北側は25号遺構に切られており、南側床面には攪乱土坑が認められる。遺構全体プランの約1/3の検出である。検出規模は長軸5.12m、短軸3.24m、深さ0.40m、主軸方位はN-68°-Wである。南西側のP1は深さ0.77mで支柱穴の可能性もある。壁溝は認められない。竪穴の覆土はローム・ロームブロック・ローム粒混入黒褐色土を主体とした自然堆

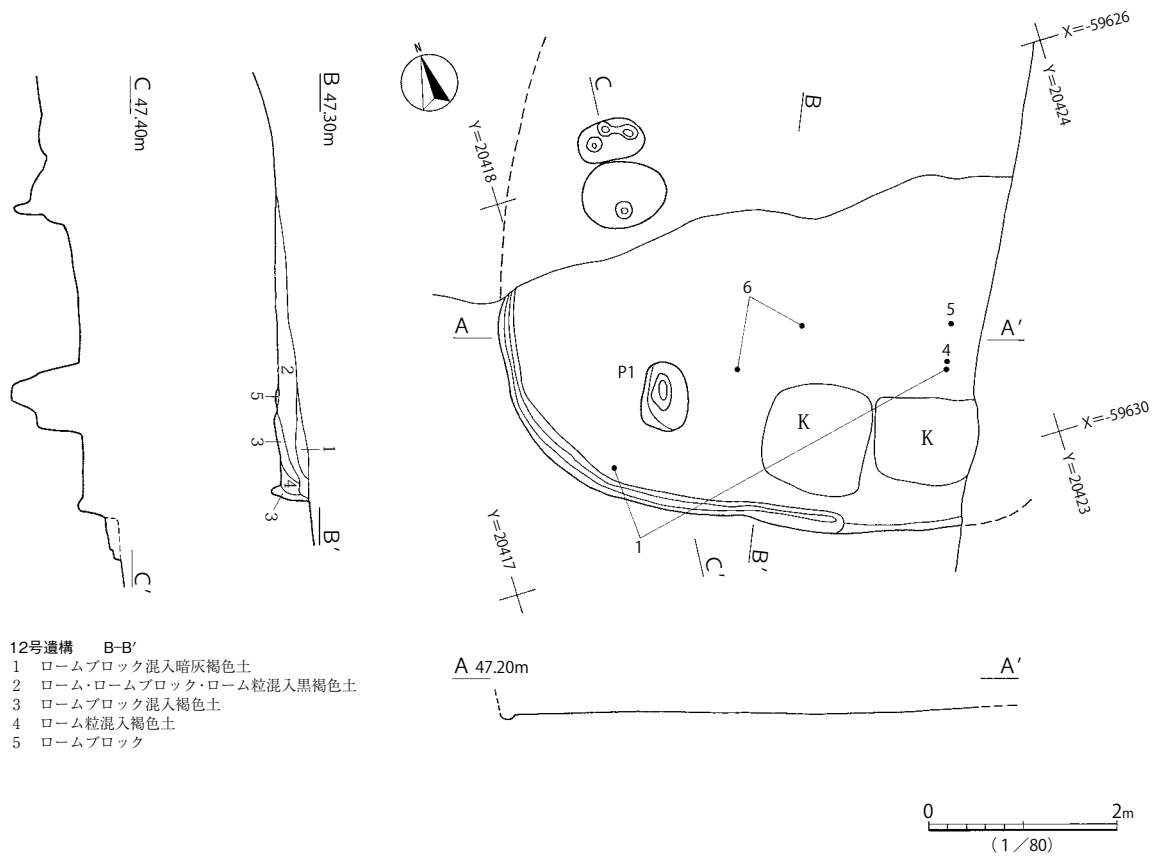


第5図 10号遺構実測図及び出土遺物実測図



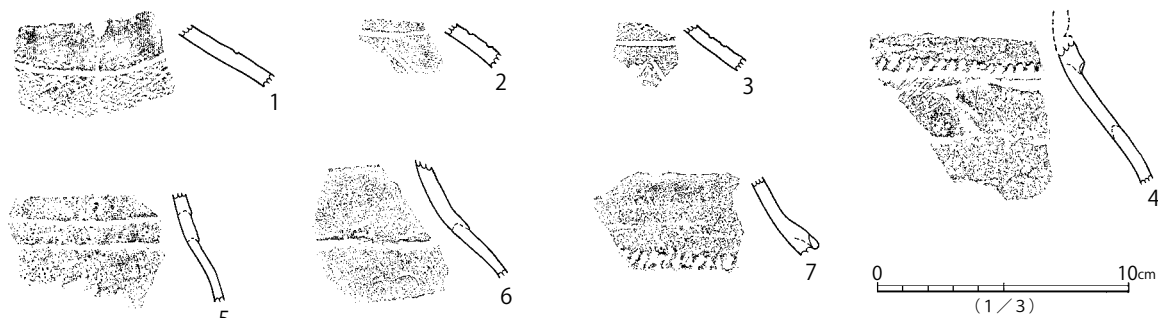


第7図 11号遺構出土遺物実測図



- 12号遺構 B-B'
- 1 ロームブロック混入暗灰褐色土
 - 2 ローム・ロームブロック・ローム粒混入黒褐色土
 - 3 ロームブロック混入褐色土
 - 4 ローム粒混入褐色土
 - 5 ロームブロック

第8図 12号遺構実測図



第9図 12号遺構出土遺物実測図

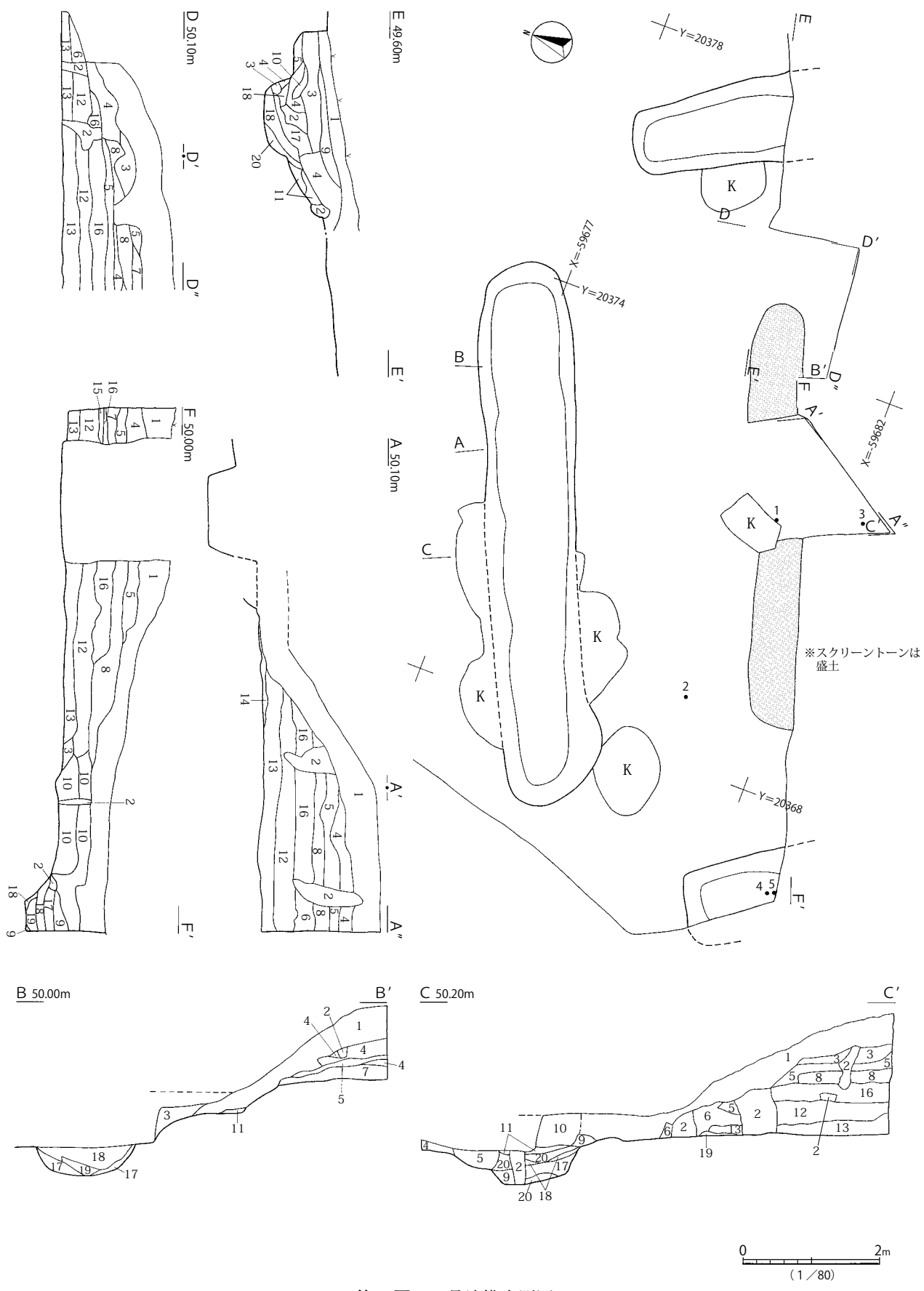
積と考えられる。出土遺物(第9図、PL. 10)1~3は、弥生土器壺片で、4~7は甕胴部片である。1は床面直上、他は覆土からの出土である。

方形周溝墓

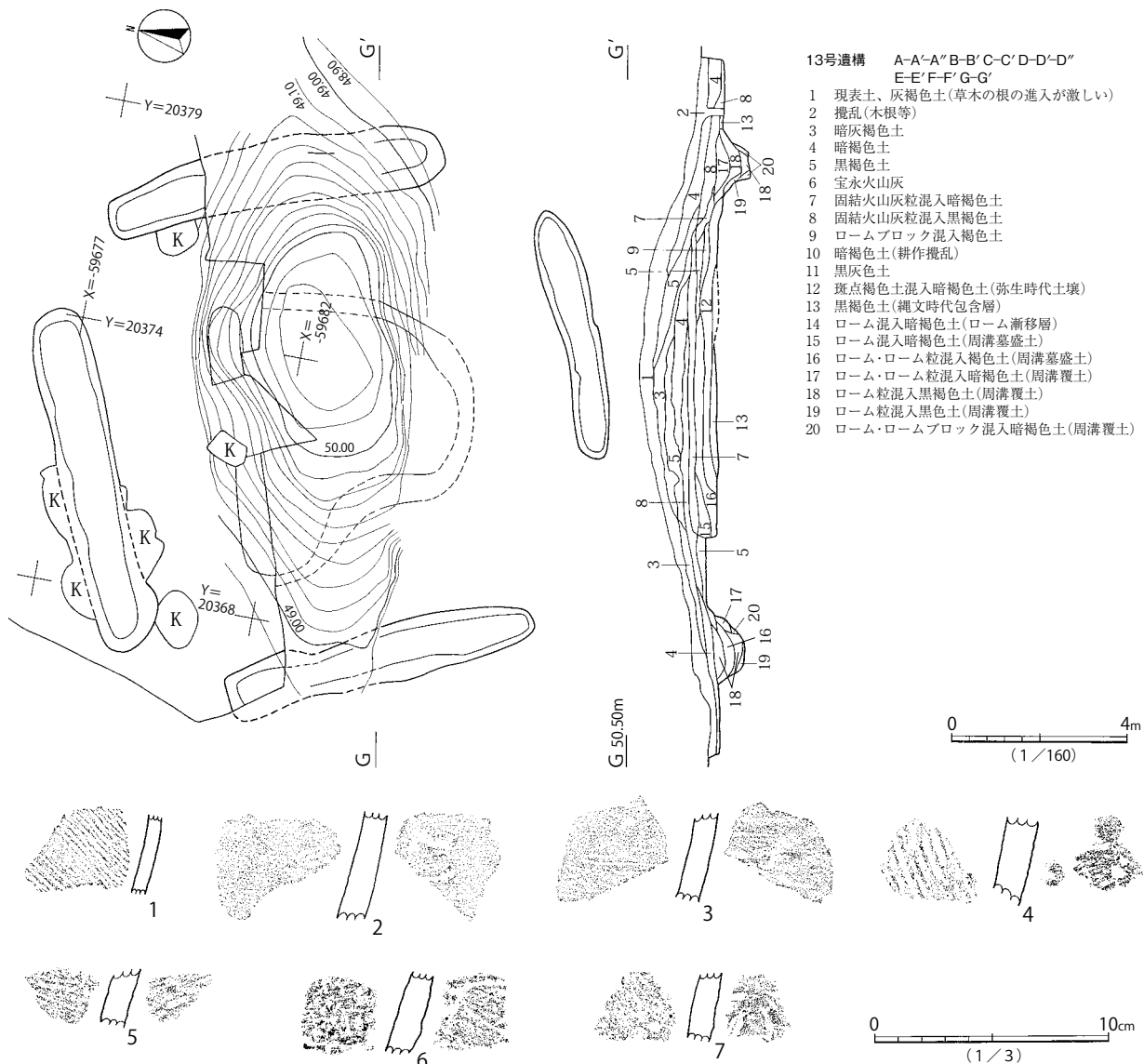
13号遺構(第10・11図、PL. 3)は、調査区の南西隅に位置し、24号遺構が当遺構の北側溝に近接する。遺構プランの南東側約1/2は平成3年度に「D30号方形周溝墓」として調査されている。今回は未調査部分の北西側約1/2の調査であり、ほぼ全体の遺構プランが判明した(第10図)。形体は四隅開口形で、方台部の規模は、南北軸10.60m、東西軸9.80m、主軸方位は南北軸でN-65°-Eである。今回調査した部分では北西側周溝を全掘したが、北東側と南西側の周溝は一部のみの調査である。北西側周溝は規模が長さ8.00m、幅1.36m、深さ0.70m、北東側周溝は、検出した長さは2.32mで、前回調査を含めた復元値は長さ7.80m、幅1.50m、深さ1.20m、南西側周溝は、検出した長さは1.42mで、前回調査を含めた復元値は長さ7.10m、幅1.20m、深さ0.40mを測る。周溝の覆土は、ローム・ローム粒混入暗褐色土、ローム粒混入黒褐色土などを主体とした自然堆積と推定される。方台部中央の一部に15層のローム混入暗褐色土と16層のローム・ローム粒混入褐色土で構成する盛土(高さ0.30m)が認められる。なお、平成3年度の調査でも、盛土は確認されており、周溝から約1.50~2.00m離れた方台部の中央付近に残存している。調査前の盛土は高さ約1.60mあったが、15・16層より上層の盛土については後世の所産と考えている。埋葬施設は認められなかった。出土遺物(第11図、PL. 10)は、遺構に関連する時期の土器は無く、1~7は早期の縄文土器片である。南東側の前回調査では、断面方形の環状鉄片や砥石が出土しているが、遺構に関連する遺物であるかは不明である。

14号遺構・15号遺構(第12・13図、PL. 3・4)

14号遺構は、北西隅付近が未掘で、形体は北東隅と南西隅が開口していると考えられる。遺構プランの北側には攪乱土坑や溝が見られる。方台部の規模は南北軸8.32m、東西軸7.56m、主軸方位は南北軸でN-79°-Eである。南側周溝は、幅0.48~0.80mとやや細く、深さは0.30m、北側周溝は、幅1.00~1.20mと広く、深さは0.32mを測る。周溝の断面は逆台形で、覆土はローム粒混入黒褐色土や褐色土を主体とした自然堆積とみられる。埋葬施設は20号遺構(土壙墓)と考えられ、方台部南側中央に設置されている。出土遺物(第14・15図、PL. 8・9・11)1~8・10・11・13・15~26は、弥生土器壺、9・14は甕、12は椀である。14号遺構は遺物量が多く、特に北側周溝東寄りに遺物の集中分布地点があり、1・2・4~10・13~23・25が覆土上層から、このうち2は15号遺構出土土器3点と接合する。3は方台部上の出土であるが、17号遺構に伴う可能性もある。22は、15号遺構北側周溝東端部上層出土土器1点と接合、11は北側周溝内、12は14号と15号遺構の北側周溝接続部付近で、いずれも覆土上層、24・26は北側周溝外の出土である。



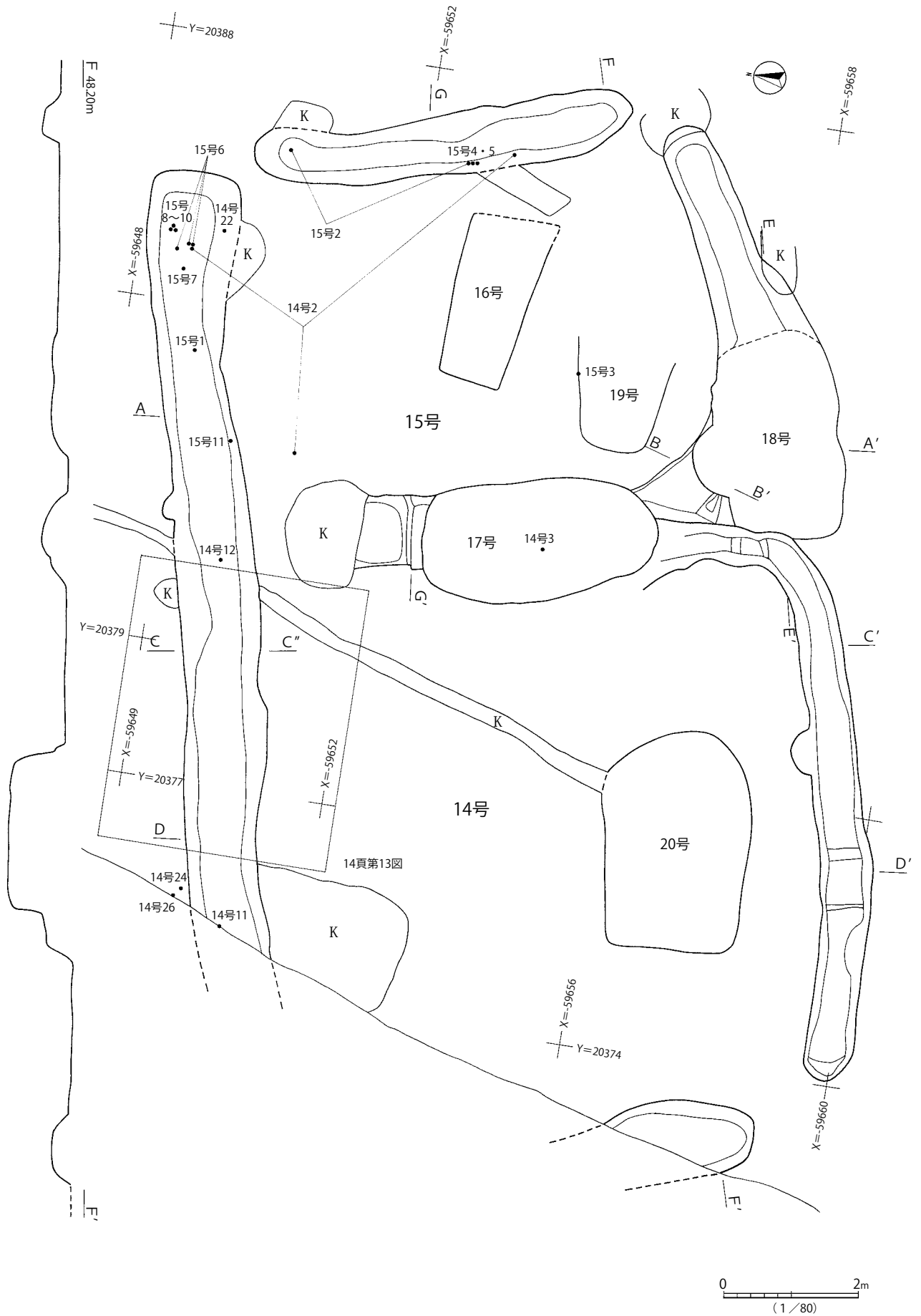
第10図 13号遺構実測図



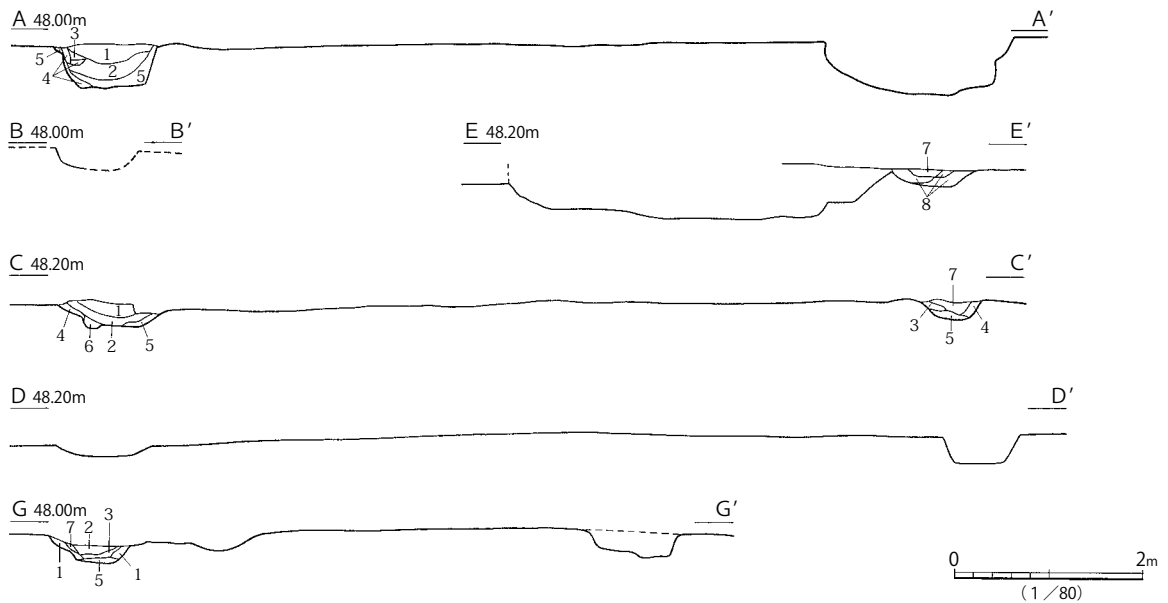
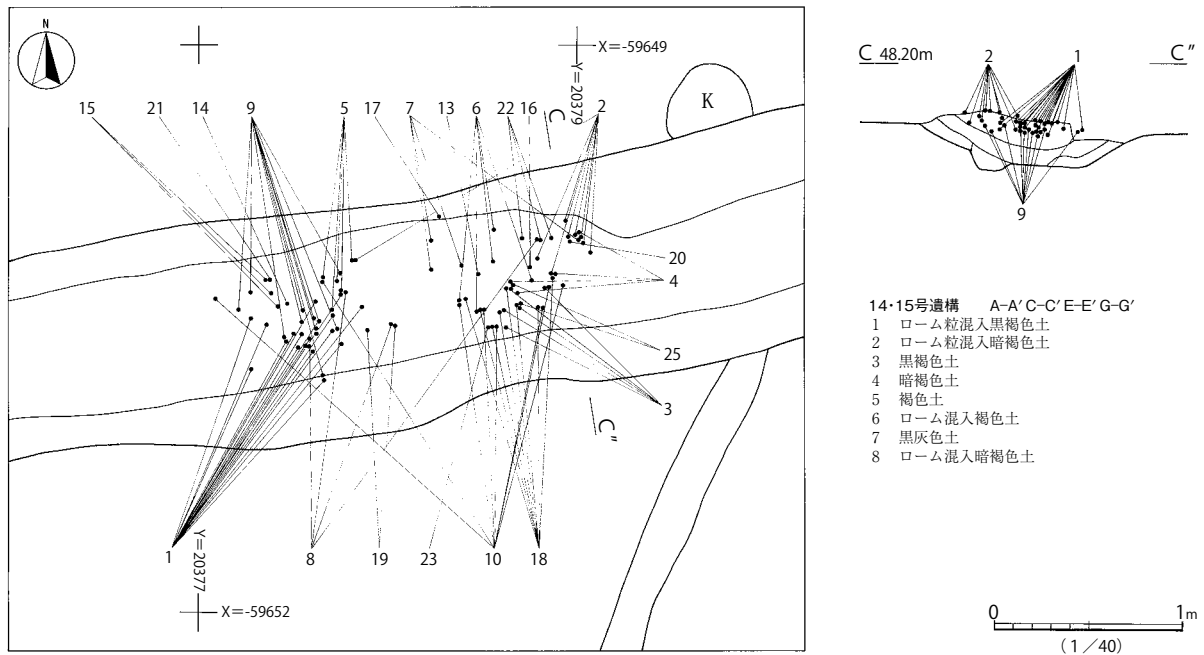
第11図 13号遺構実測図(合成)及び出土遺物実測図

15号遺構は、調査区の西側に位置し、形体は北東側、南東側及び北西側の3隅が開口し、北側周溝は14号遺構の北側周溝と直線的に連結する。南側周溝は西側で18号遺構(土墳墓)に切られているが、南西側は内側に弧状で14号遺構の東側周溝に連結する溝が認められる。当溝は15号遺構の溝と考えられ、14号遺構の南側周溝とは連結していない。15号遺構は、14号遺構を東側に拡張した遺構と考えられ、埋葬施設は14号遺構の東側周溝部分中央に位置する17号遺構(土墳墓)とみられる。15号遺構の方台部の幅(南北軸)は7.36mである。東側周溝は長さ5.64m、幅0.92m、深さ0.22mを測る。周溝は断面逆台形で、覆土はローム粒混入暗褐色土や褐色土が主体で自然堆積である。出土遺物(第16図、PL. 11)1~10は、弥生土器壺片、11は高杯の脚部片である。特に北側周溝の東端部付近に遺物の集中分布地点が見られる。1・6~11は北側周溝内、2・4・5は東側周溝内で、いずれも覆土上層からの出土である。

14号と15号遺構を併せた拡張後の方台部の主軸方位はN-76°-Eで、検出長軸13.78mを測る。埋葬施設とみられる17号遺構は、土層観察から14号遺構の東側溝が埋没した段階で設置したと考えられる。方台部や周溝内に存在する16号・18号・19号遺構(いずれも土墳墓)は、位置関係などから追葬施設の可能性がある。



第12図 14・15号遺構実測図(1)



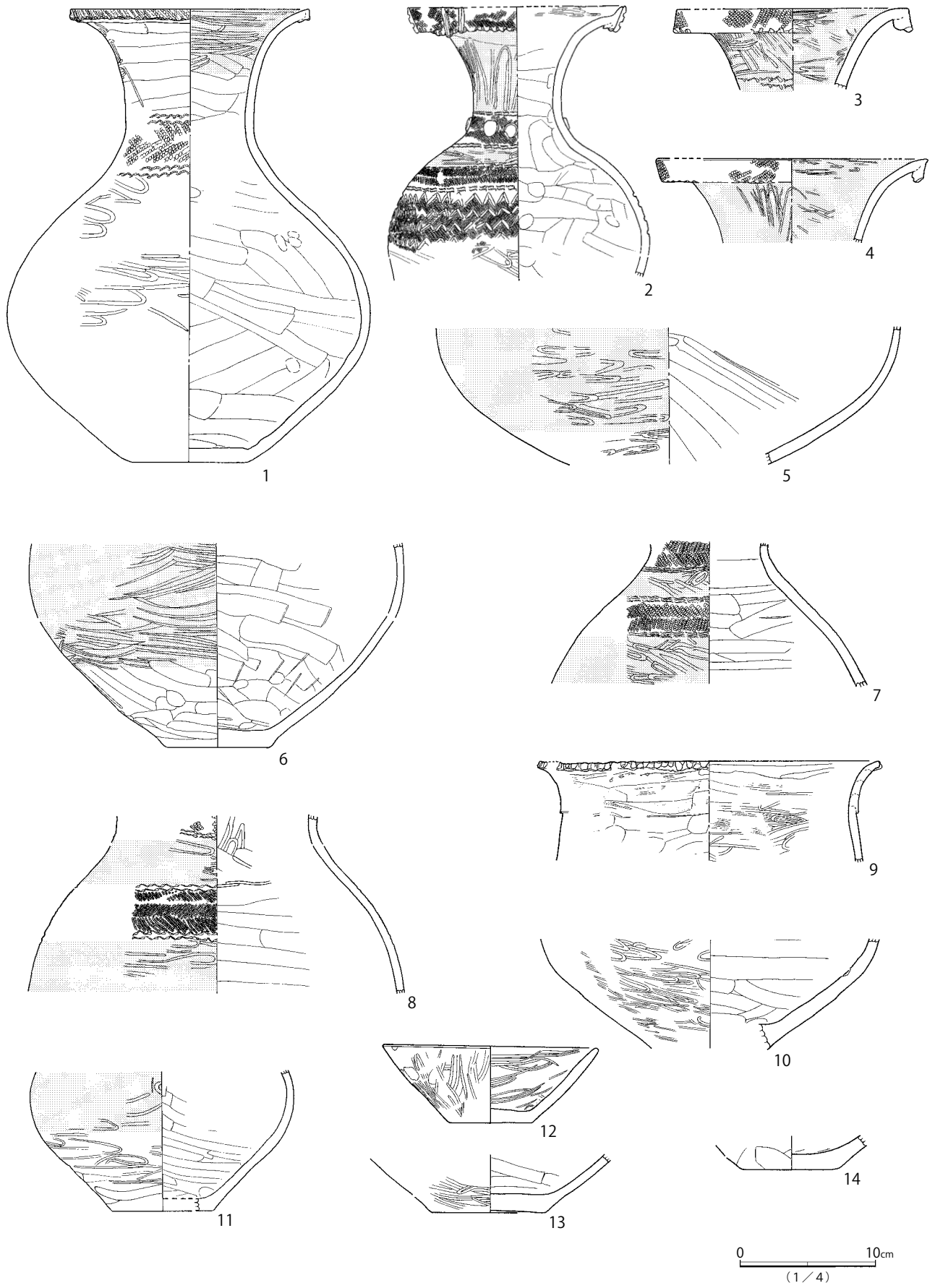
第13図 14・15号遺構実測図(2)

ある。

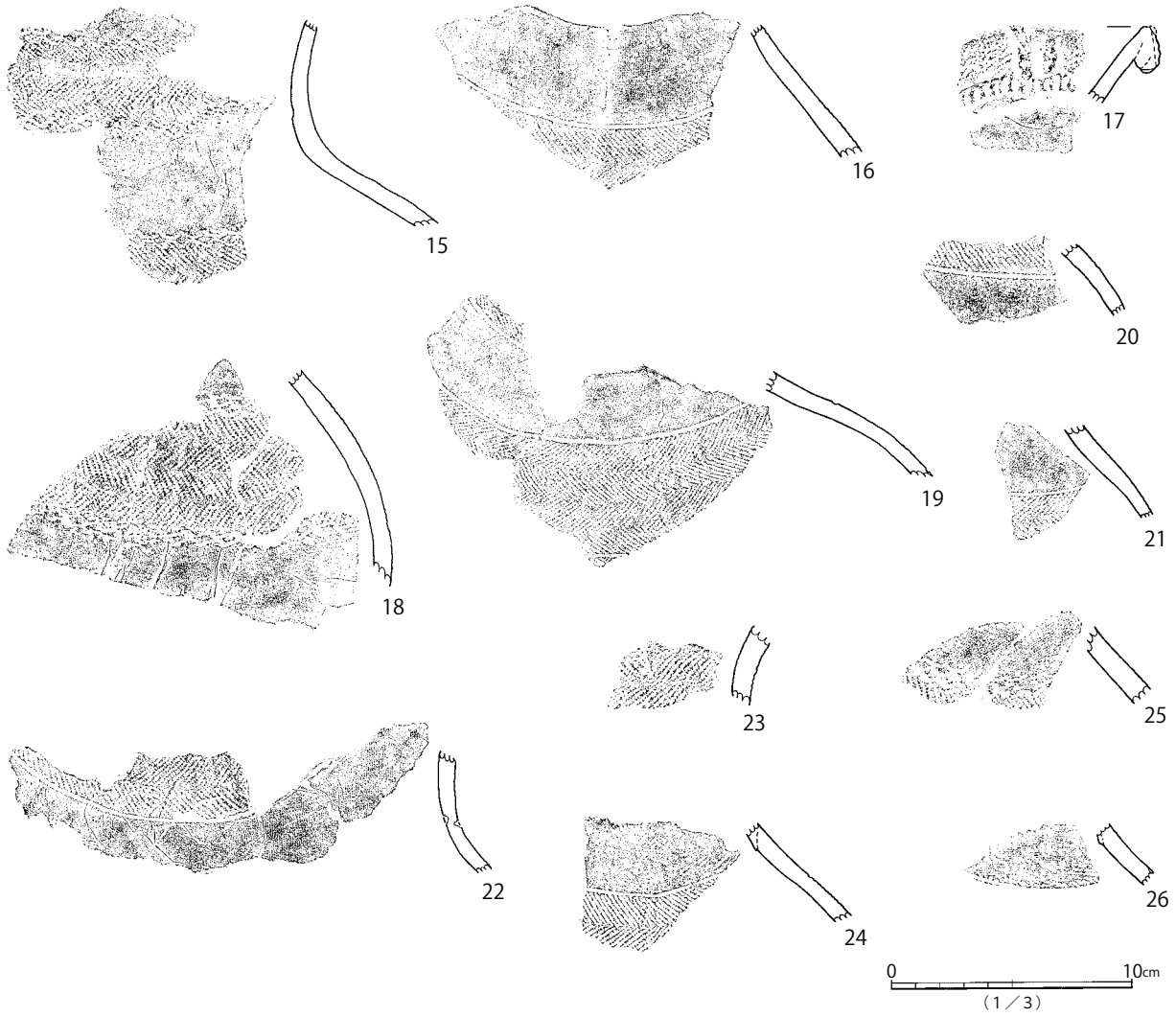
14・15号遺構一括及び縄文土器(第17図、PL.9・11・12)1は、弥生土器鉢片、2は土師器高杯の脚裾部片、3は土師器鉢体部、4は板状不明鉄片である。5・6・8~10・12~24は縄文時代早期条痕文系深鉢片、26は円形刺突文が施される早期後半の鶴ヶ島台式、7・25・27は前期の深鉢片とみられ、7は薄手で口唇部から両面に刺突文、25は厚手でやや粗い沈線と刺突文が施されている。28は中期加曽利E式、29・33・34は後期加曽利B式、11・30~32は晩期の安行式、35は中世の瀬戸美濃系播鉢の胴下部片である。後期様式IV期~大窯期と考えられる。

土壌墓

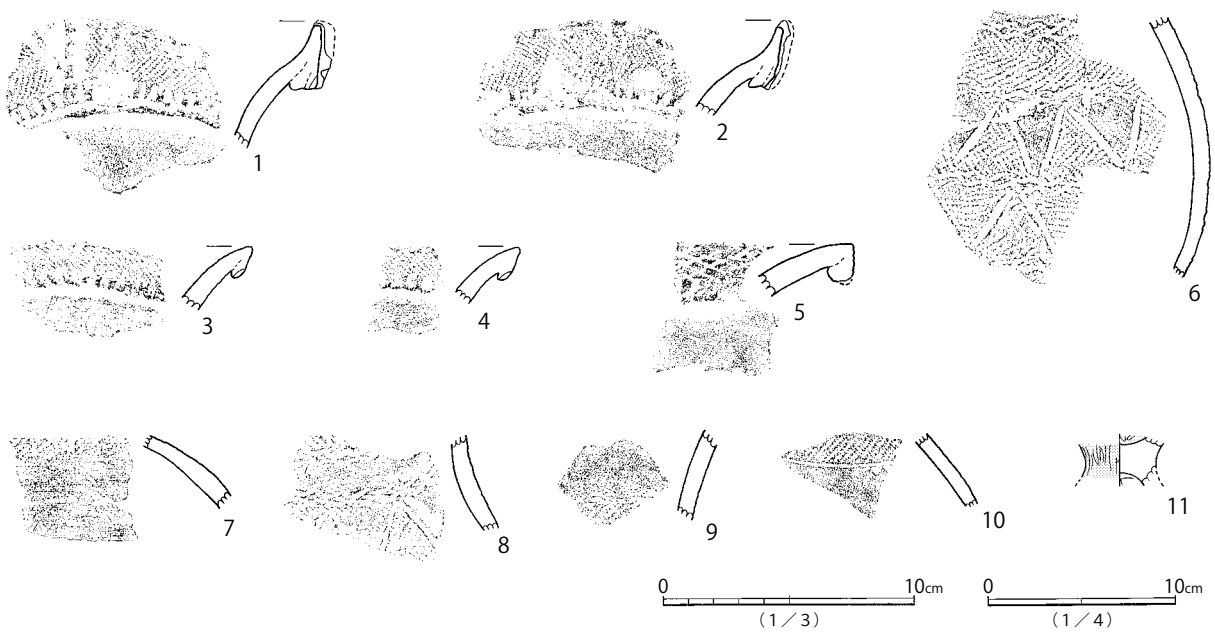
16号遺構(第18図、PL.4)は、15号遺構の方台部内中央やや東寄りに位置し、掘り方の形体は長方形であるが東側はやや幅広い。検出した深さは0.25m、東側の立ち上がりは検出できず、残存状況はやや



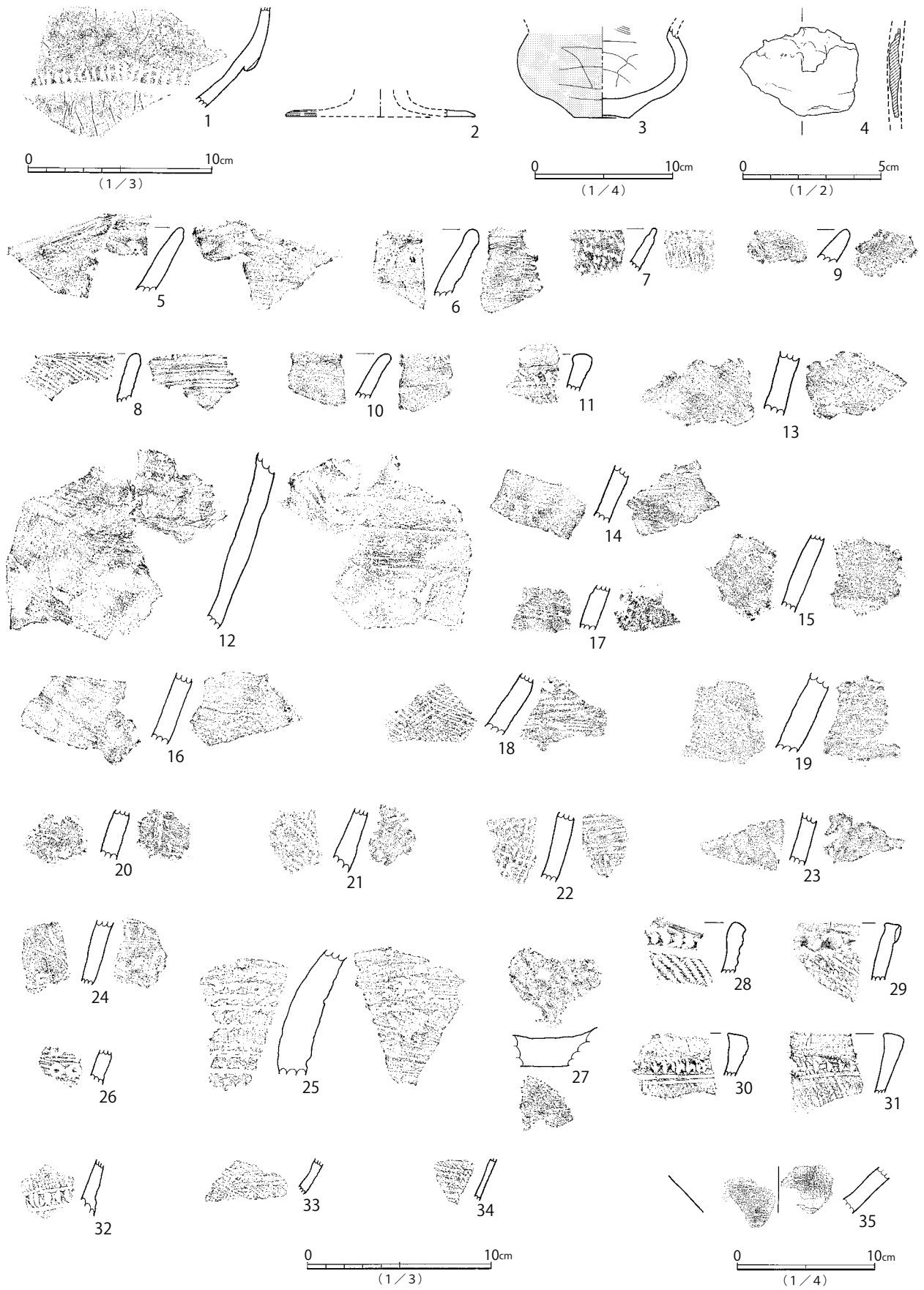
第14图 14号遺構出土遺物実測図(1)



第15图 14号遺構出土遺物実測図(2)



第16图 15号遺構出土遺物実測図



第17図 14・15号遺構一括出土遺物及び縄文土器実測図

悪い。掘り方の規模は推定長軸2.45m、短軸1.10m、主軸方位N-84°-Wを測る。灰白色粘土の裏込めが認められる。木棺痕の幅は0.55mを測る。底面は若干の凹凸が見られる。覆土は3層のローム粒混入暗褐色土が木棺痕と推定される。出土遺物(第19図、PL. 12)1は鉄製直刃鎌片である。北側中央の底面付近からの出土で棺外とみられる。

17号遺構(第18図、PL. 4・5)は、14号遺構の東側周溝中央付近に位置し、掘り方の形体は長円形で、規模は長軸3.50m、短軸1.80m、深さ0.70m、主軸方位N-10°-W、木棺痕は長さ2.25m、幅0.55mを測る。底面は平坦である。覆土は5～7層のローム混入褐色土などが裏込め土、木棺痕が4層のローム粒・ロームブロック混入暗褐色土である。当遺構は設置された位置から14号遺構を15号遺構との拡張後の埋葬施設とみられる。出土遺物(第20図、PL. 9・12・13)1～6は、弥生土器壺片(1・2が口縁部片)、7・8は碗の口縁部片、9は甕である。いずれも覆土上層より出土。10・11は鉄釧で10は先端部片、11は斜めに重なった状態で1点残存。10は底面直上で中央東側、11は同じく中央やや南寄りからの出土である。

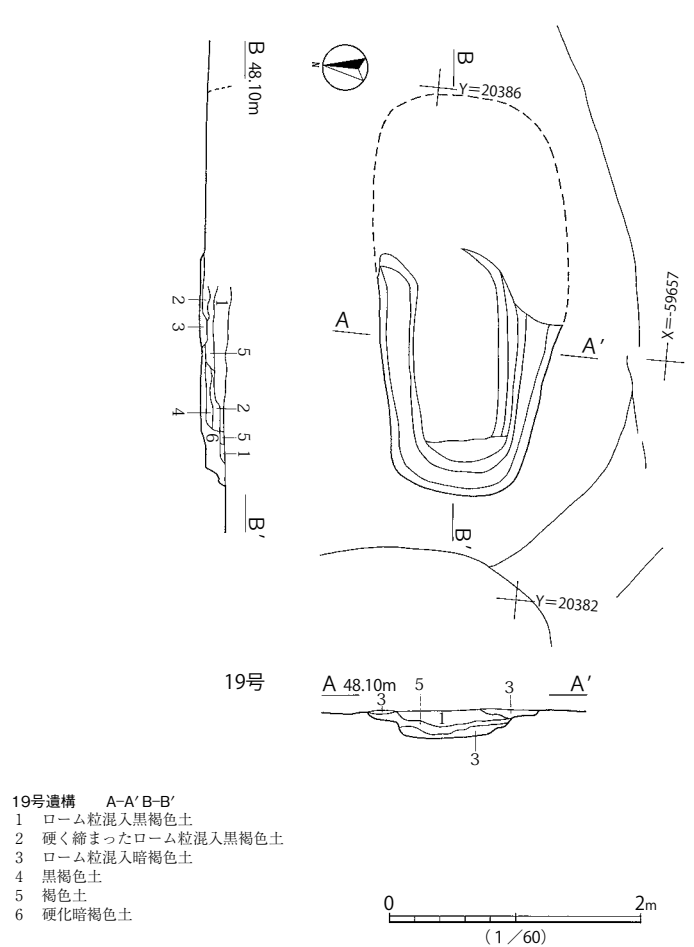
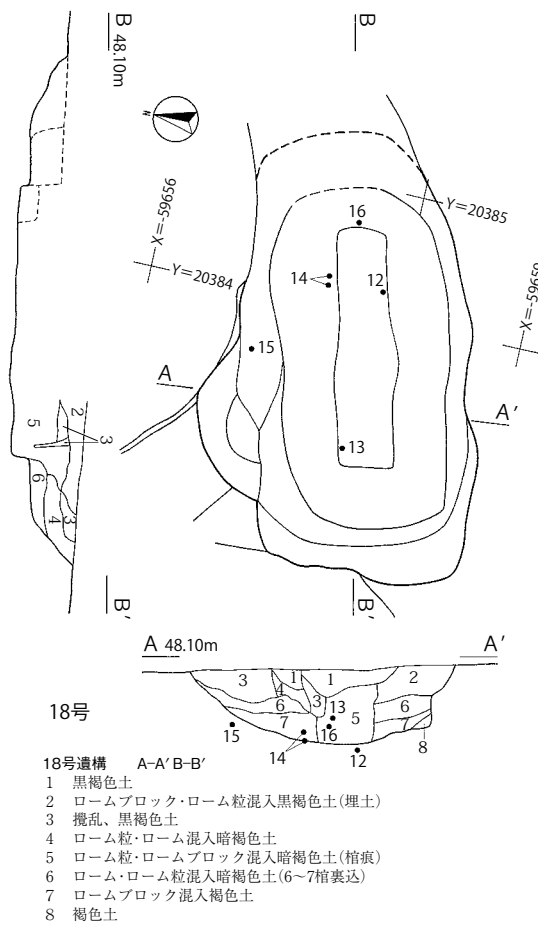
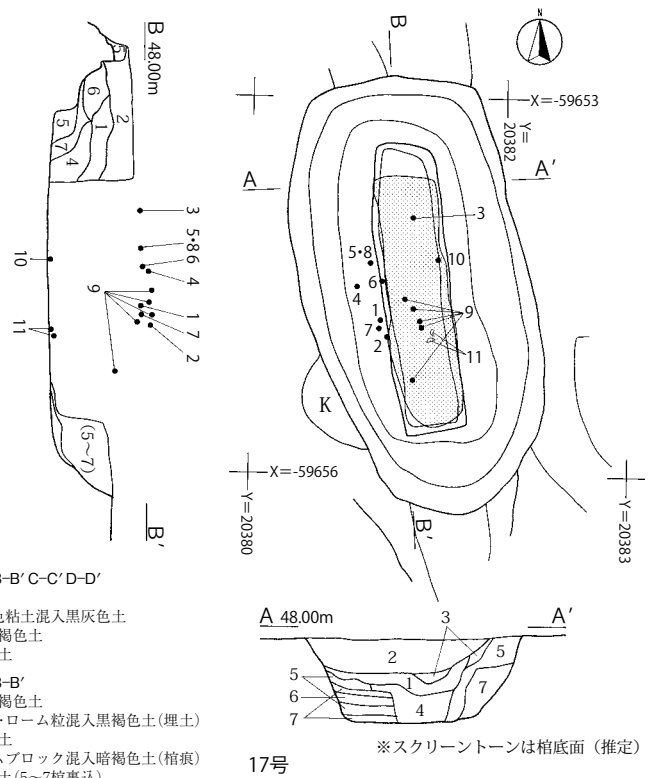
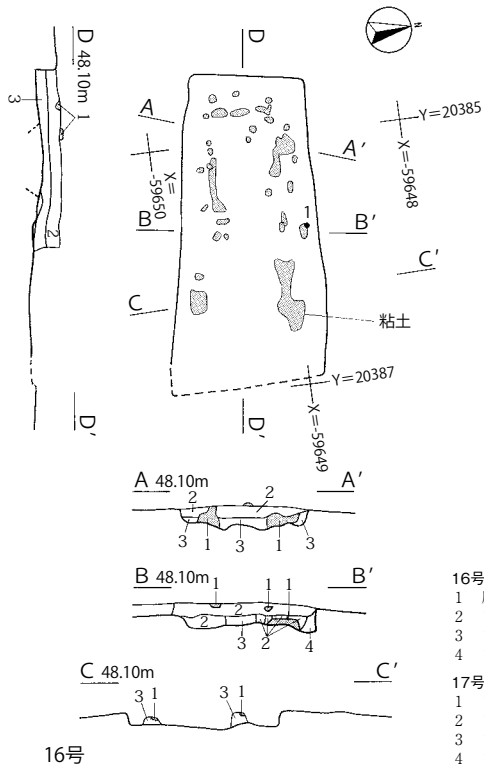
18号遺構(第18図、PL. 5)は、15号遺構の南側周溝を切って位置する。掘り方の形体は長円形で北側の一部が広がる。規模は推定長軸3.55m、短軸2.15m、深さ0.60m、主軸方位N-75°-E、木棺痕は長さ1.90m、幅0.50m、深さ0.45mを測る。底面は平坦である。覆土は6層のローム・ローム粒混入暗褐色土と7層のロームブロック混入褐色土が裏込め土で、5層のローム粒・ロームブロック混入暗褐色土が木棺痕とみられる。出土遺物(第20図、PL. 9・13)12は、弥生土器碗、13・15は壺胴部片、14は壺頸部片、16は複合口縁部片である。12は東側底面、13・14・16は覆土下層、15は北側覆土より出土した。

19号遺構(第18図、PL. 5)は、15号遺構の方台部内南西側に位置し、東側は欠損している。掘り方の形体は長円形で、規模は推定長軸3.20m、短軸1.45m、深さ0.10m、主軸方位N-83°-E、木棺痕の長さは推定1.75mと考えられるが、木棺痕の東側底面の保存状態が不良である。木棺痕の幅は0.80m、深さは0.10mを測る。底面は平坦である。覆土の残存状況は不良だが、3層のローム粒混入暗褐色土が木棺痕の一部とみられる。出土遺物は皆無である。

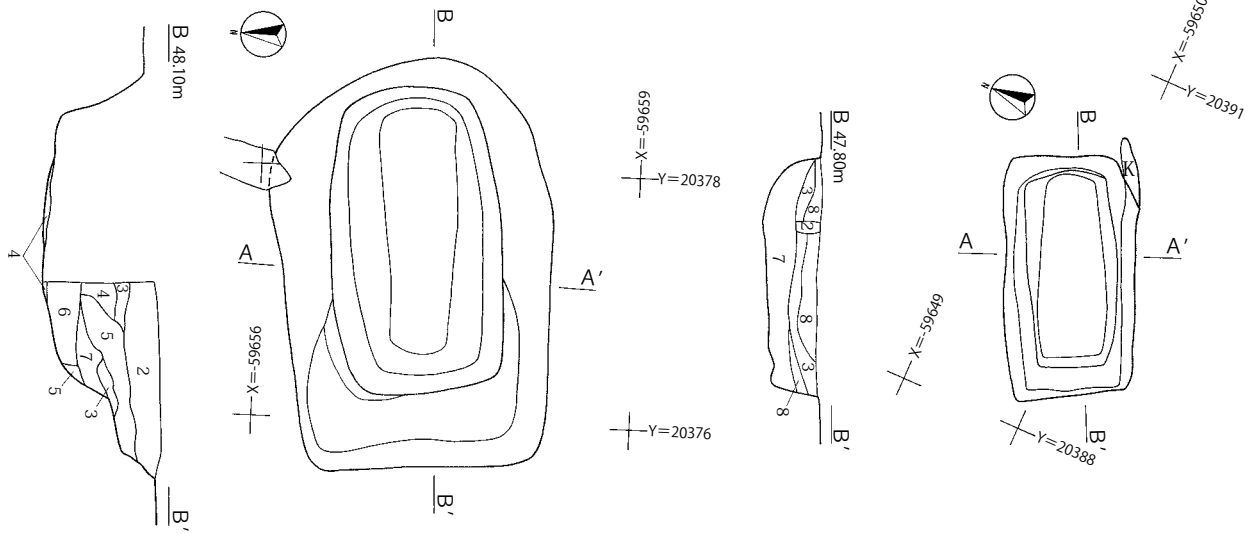
20号遺構(第19図、PL. 6)は、14号遺構の方台部内やや南寄りに位置する。掘り方の形体は長円形で、規模は長軸3.30m、短軸2.20m、深さ0.95m、主軸方位N-85°-E、木棺痕は長さ1.95m、幅0.60m、深さ0.30mを測る。底面は平坦である。覆土は8層のローム混入褐色土と9層の暗褐色土が裏込め土、6層のローム粒・ロームブロック混入暗褐色土が木棺痕と考えられる。当遺構は設置された位置などから考えて14号遺構の埋葬施設と考えられる。出土遺物は皆無である。

21号遺構(第19図、PL. 6)は、15号遺構の北東側1.50mに位置する。南側0.80mに22号遺構がほぼ並列の位置に存在する。掘り方の形体は長方形で、規模は長軸1.90m、短軸1.05m、深さ0.60m、主軸方位N-66°-E、木棺痕は長さ1.50m、幅0.55m、深さ0.35mを測る。底面は平坦である。覆土は7層のローム粒混入黒褐色土が木棺痕の可能性がある。出土遺物(第20図、PL. 9・13)17は、弥生土器甕底部片で覆土より出土した。18・19は早期条痕文系の縄文土器片である。

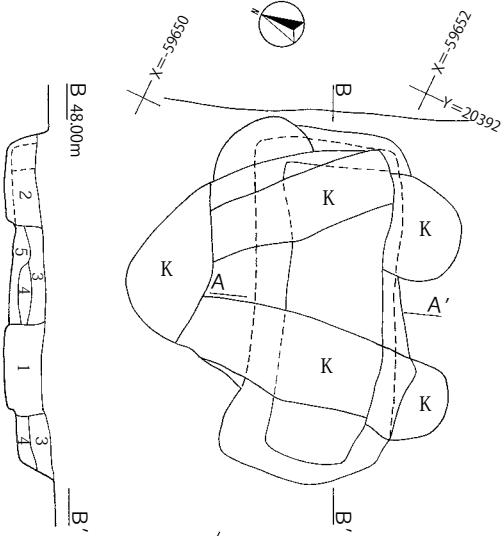
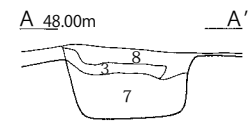
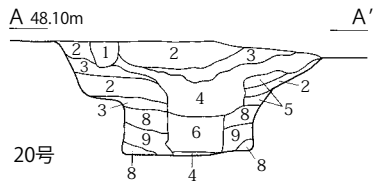
22号遺構(第19図、PL. 6)は、15号遺構の北東側1.10mに位置する。北側0.80mに21号遺構がほぼ並列の場所に存在する。南北方向に攪乱土坑が数か所入り、保存状況は不良である。掘り方の形体は長方形で、規模は推定長軸2.72m、推定短軸1.15m、深さ0.39m、主軸方位N-72°-E、木棺痕は不明確であるが、推定長さ2.35m、幅0.78m、深さ0.35mを測る。底面は平坦である。覆土は3層のローム粒混入暗褐色土が主体である。出土遺物は皆無である。本遺構は、設置位置や遺構の方向性から考えて、21号遺構に近い



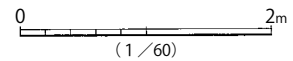
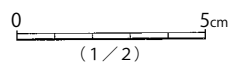
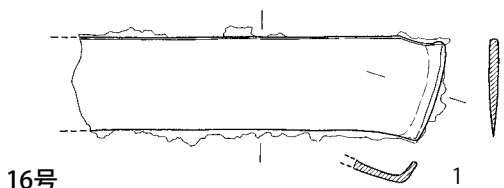
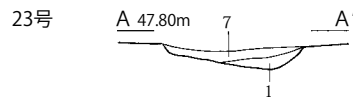
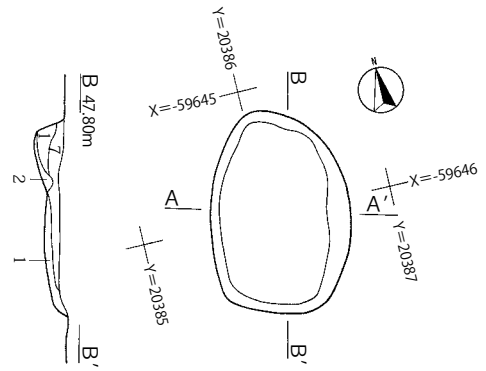
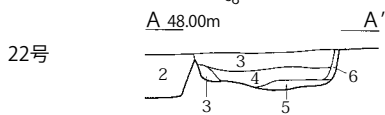
第18図 16~19号遺構実測図



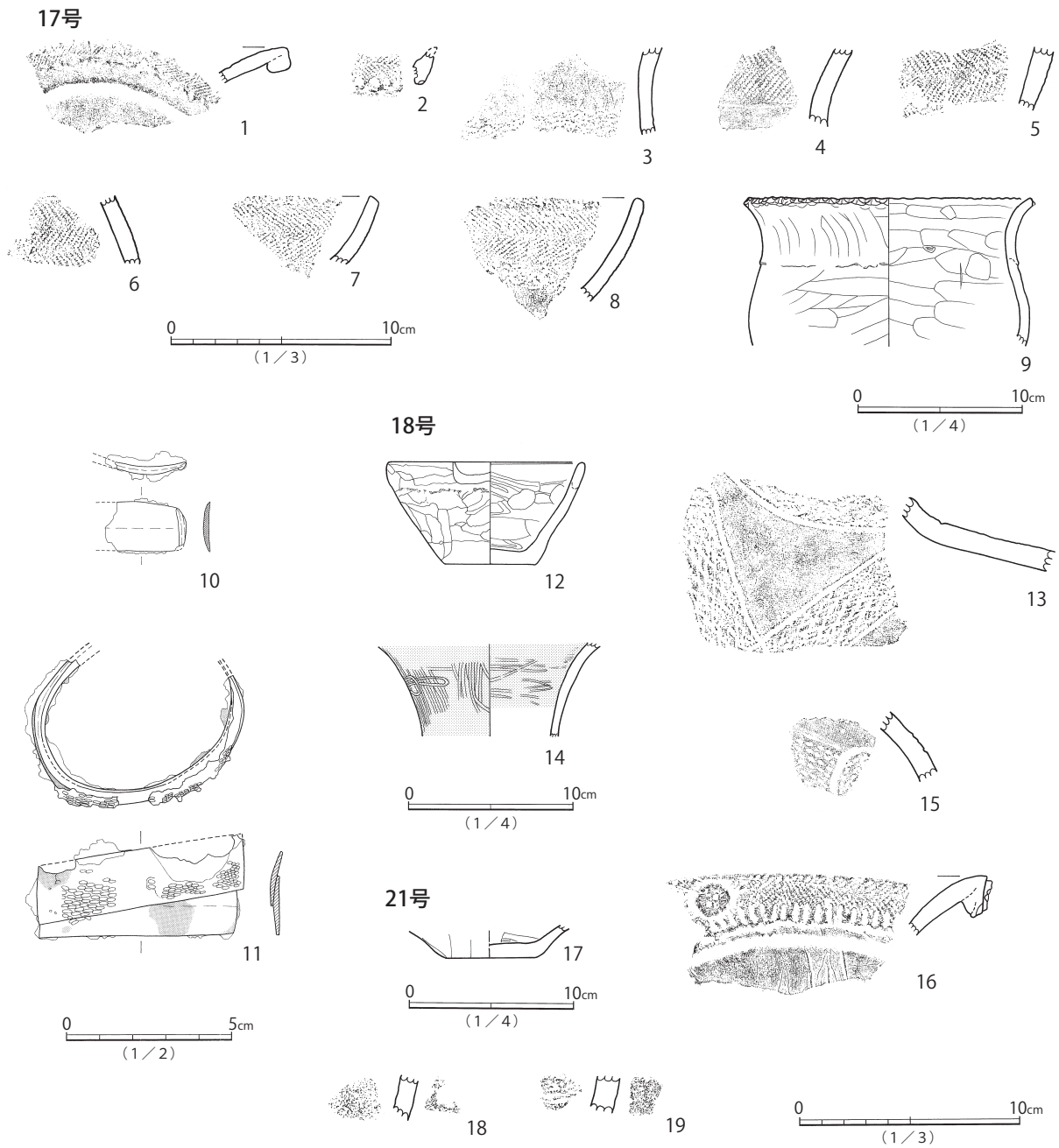
- 20号遺構 A-A'-B-B'
- 1 攪乱、黒褐色土
 - 2 ロームブロック・ローム粒混入黒褐色土
 - 3 ローム粒・ローム混入黒色土(2~5埋土)
 - 4 ローム粒・ローム混入暗褐色土
 - 5 ロームブロック混入褐色土
 - 6 ローム粒・ロームブロック混入暗褐色土(箱痕)
 - 7 ロームブロック混入褐色土
 - 8 ローム混入褐色土(8~9箱裏込)
 - 9 暗褐色土



- 21・22・23号遺構 A-A'-B-B'
- 1 耕作、攪乱、灰褐色土
 - 2 攪乱、暗灰褐色土
 - 3 ローム粒混入暗褐色土
 - 4 暗褐色土
 - 5 褐色土
 - 6 黒褐色土
 - 7 ローム粒混入黒褐色土
 - 8 黒褐色土



第19図 20~23号遺構実測図及び16号遺構出土遺物実測図



第20図 17・18・21号遺構出土遺物実測図

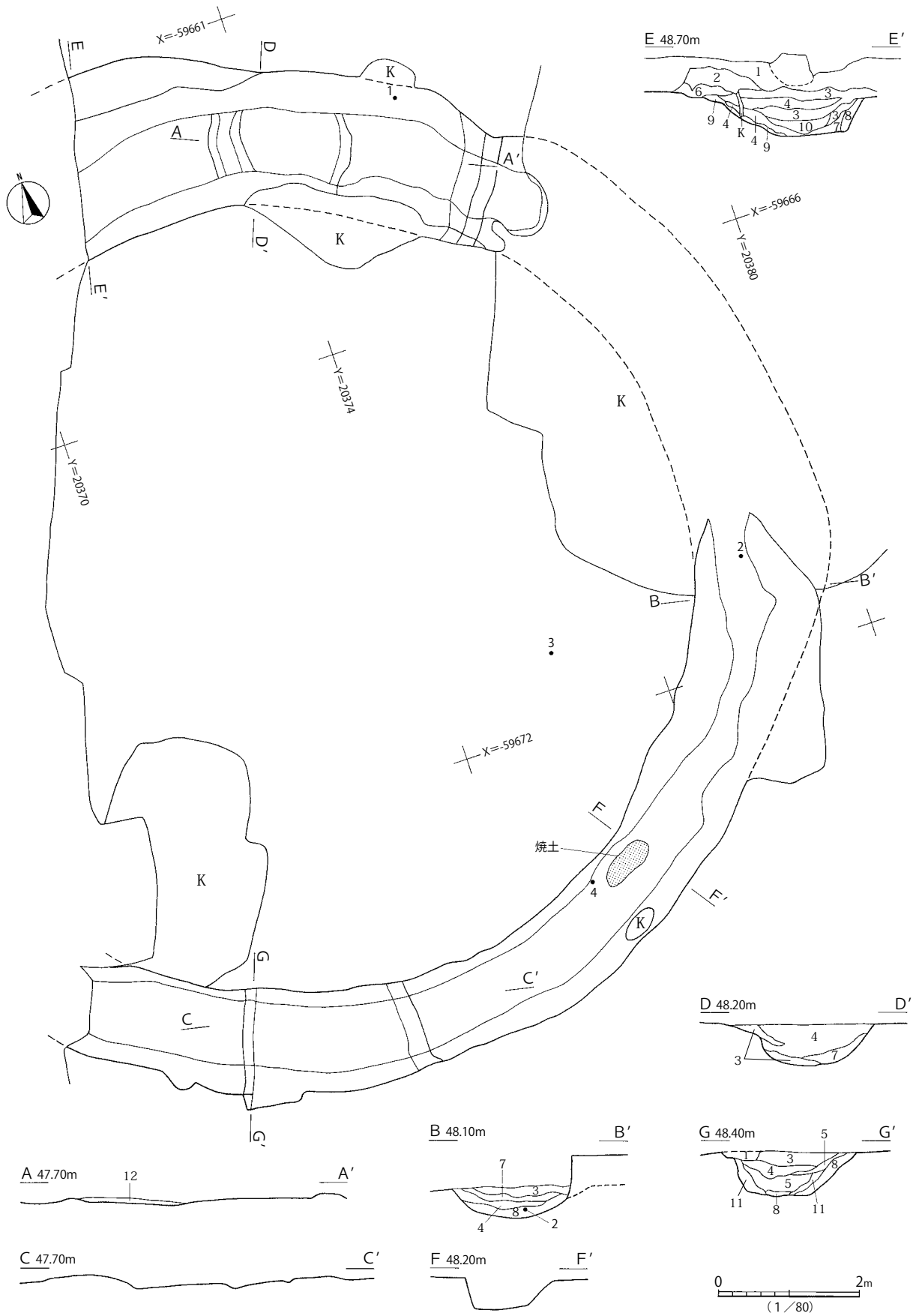
時期に埋葬された可能性がある。

土坑

23号遺構(第19図、PL. 6)は、15号遺構の北側1.50mに位置する。掘り方の形体は長円形で、規模は長軸1.60m、短軸1.07m、深さ0.30m、主軸方位N-12°-Eを測る。木棺痕は認められない。出土遺物は皆無である。当遺構は、覆土が21・22号遺構と似ているため同時期の遺構として扱ったが、性格は不明である。

円墳(円形周溝)

24号遺構(第21図、PL. 6・7)は、調査区の南西側に位置し、北側1.60mに14号遺構、南側には13号遺構の北西側周溝が接している。全体プランの西側約1/3が未掘部分である。墳丘は検出できず周溝のみの



第21図 24号遺構実測図

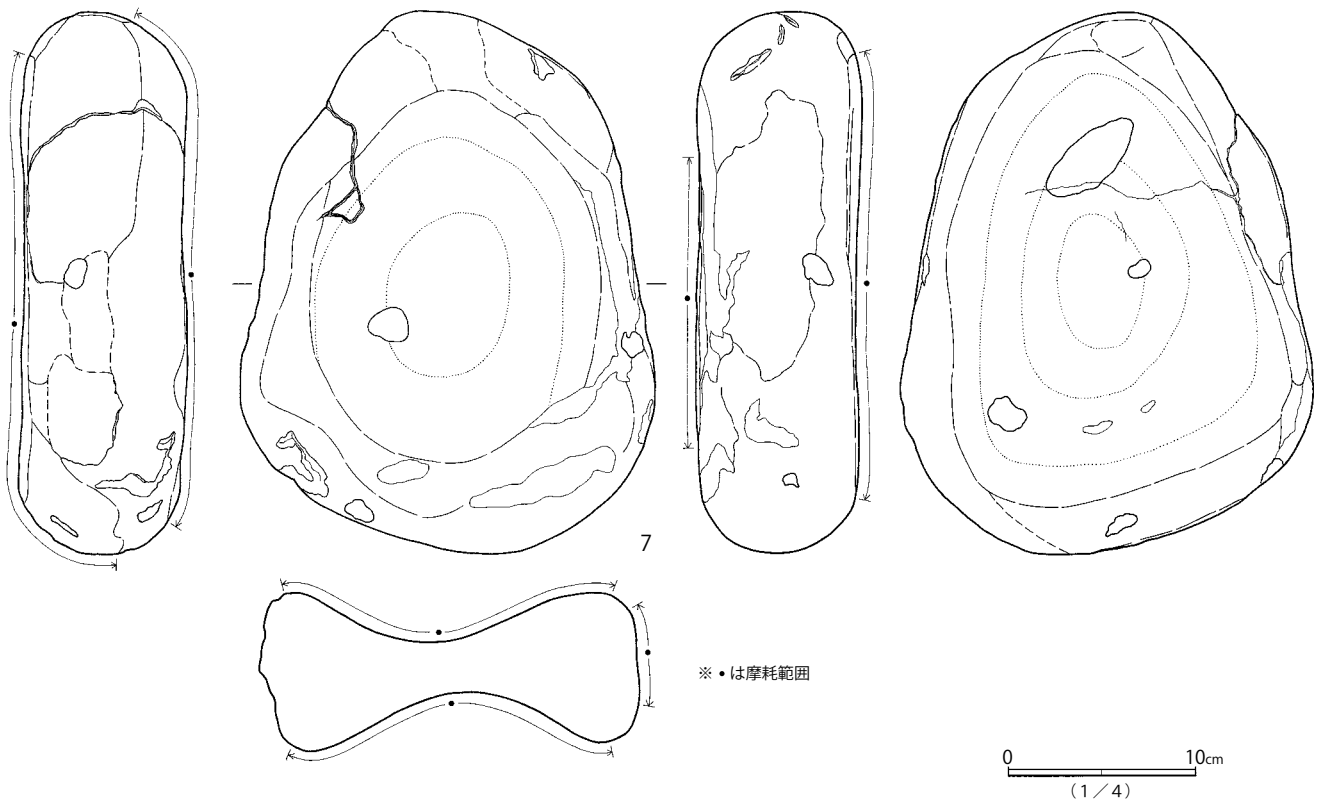
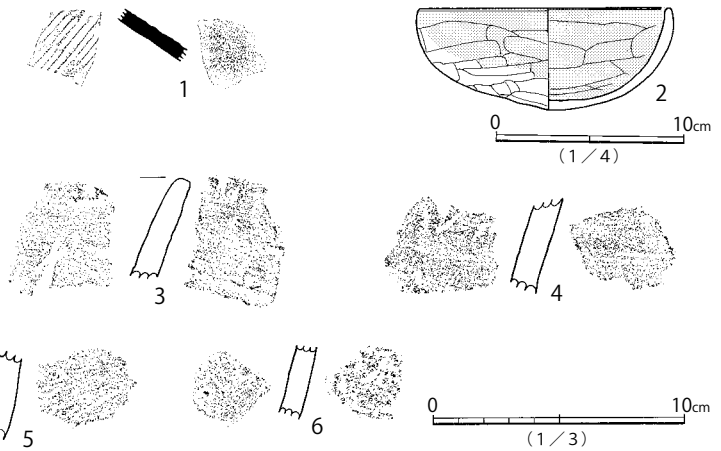
調査である。東側と南西側に大きな攪乱が存在する。規模は周溝を含めた外径が14.84m、内径は11.00m、周溝の幅は1.20~2.40m、深さは0.60mである。埋葬施設は認められなかった。周溝断面は逆台形で、北側と南側の周溝底面に凹凸が見られるが埋葬施設ではない。南東側周溝底面に焼土が見られる。周溝の覆土は3~11層で3層ローム混入黒褐色土、4層ローム粒混入黒色土などを主体とした自然堆積である。出土遺物(第22図、PL.9・13)1は、須恵器甕胴部小片で北側周溝の覆土上層、2は土師器杯で東側周溝の覆土中層から出土している。3~6は早期条痕文系の縄文土器である。7は縄文時代の石皿である。

道路状遺構

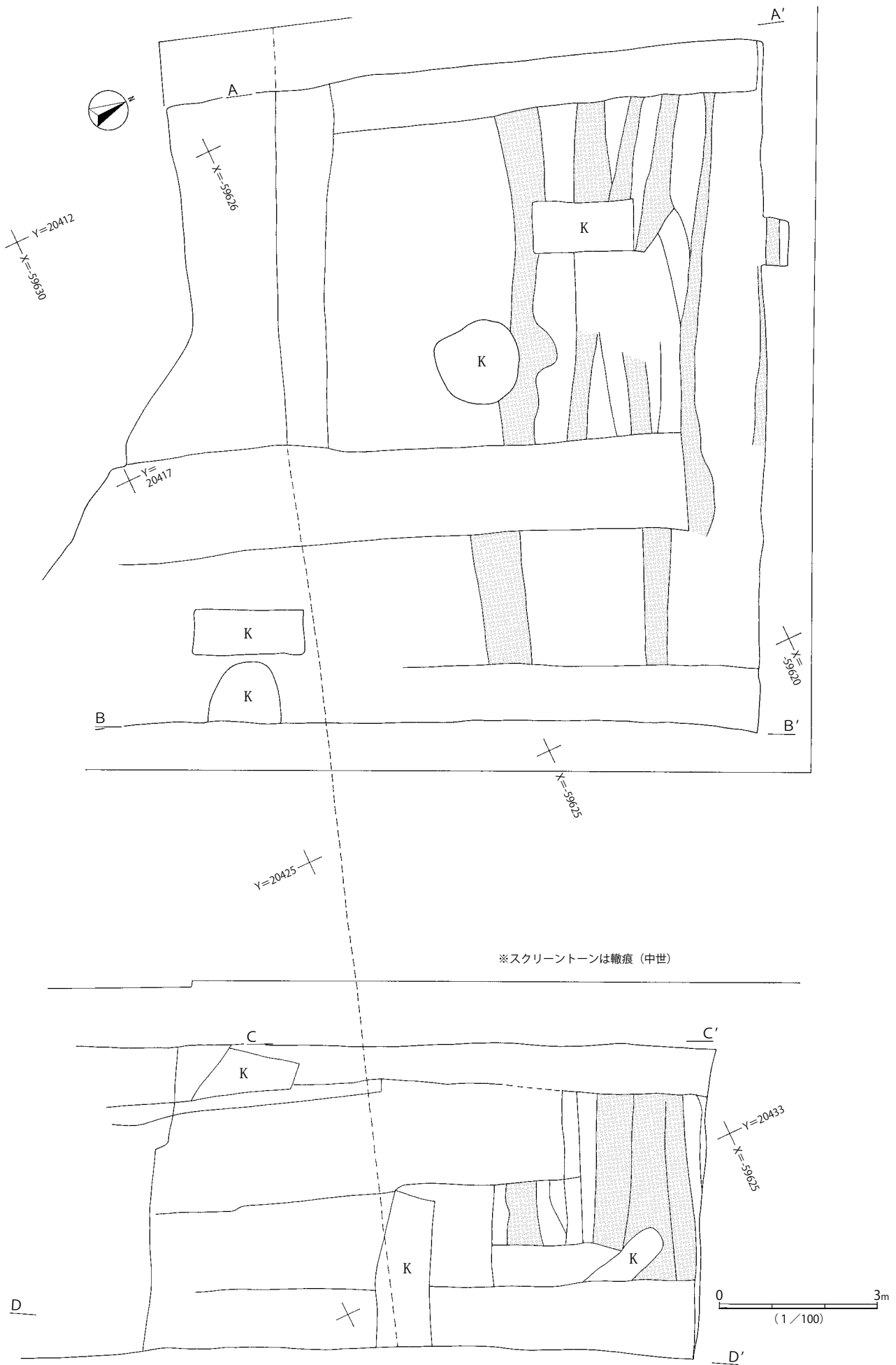
25号遺構(第23・24・25図、PL.7)は、調査区の北側に位置し、12号遺構のプラン北側を約1/3切っている。当遺構の全体幅は、北側の立ち上がり部分が未調査のため確認出来なかった。遺構は部分的に攪乱

24号遺構 A-A' B-B' D-D' E-E' G-G'

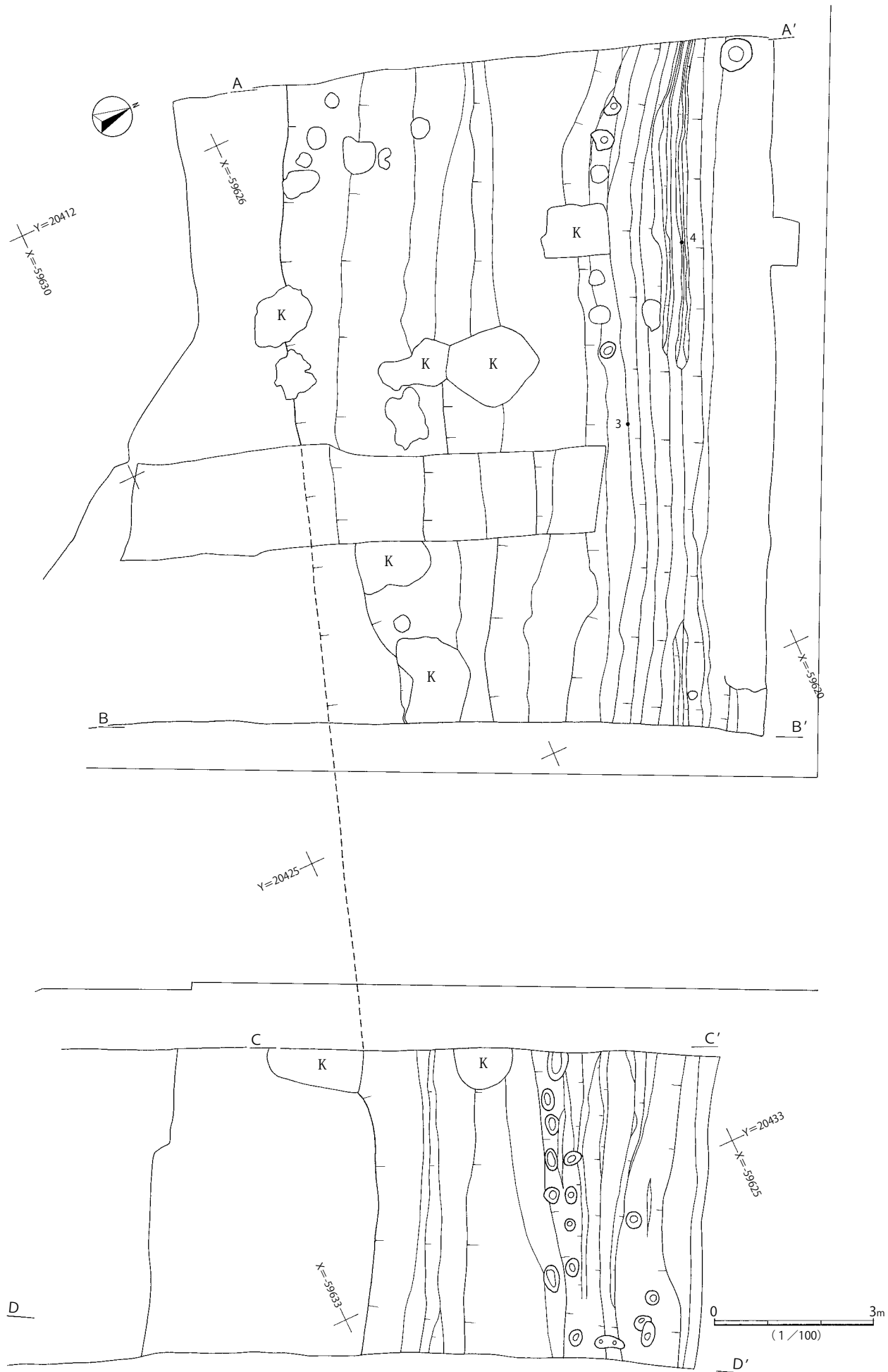
- 1 現表土、灰褐色土
- 2 耕作土、暗灰褐色土
- 3 ローム粒混入黒褐色土
- 4 ローム粒混入黒色土
- 5 ローム混入黒褐色土
- 6 黒褐色土
- 7 ローム・ローム粒混入暗褐色土
- 8 ローム混入褐色土
- 9 ローム・ロームブロック混入褐色土
- 10 ローム粒混入黒灰色土
- 11 ローム混入灰褐色土
- 12 ローム・ロームブロック混入暗褐色土



第22図 24号遺構出土遺物実測図

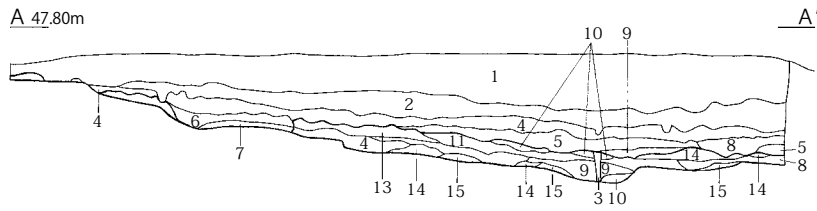


第23図 25号遺構実測図(1)



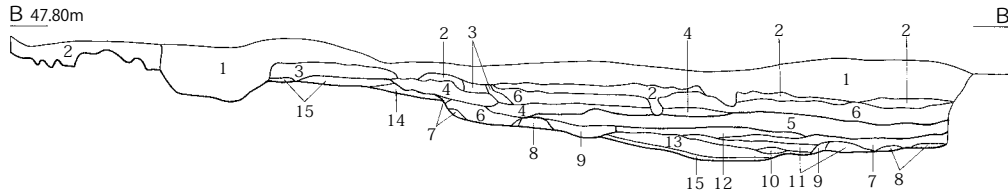
第24図 25号遺構実測図(2)

A 47.80m

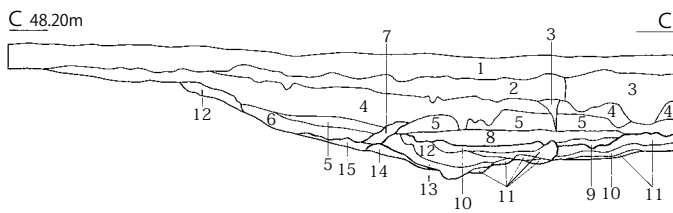


- 25号遺構 A-A'-B-B'-C-C'-D-D'
- 1 現表土、灰褐色土、客土(山砂とローム)
 - 2 旧表土、ローム混入灰褐色土(細地耕作土)
 - 3 攪乱、ローム混入灰褐色土(木根等)
 - 4 ローム粒混入灰褐色土(4~6近世以降)
 - 5 ローム粒混入暗褐色土
 - 6 宝永火山灰・ローム粒混入灰褐色土
 - 7 ロームブロック混入褐色土
 - 8 暗褐色土
 - 9 黒褐色土
 - 10 硬化灰褐色土(10~11轍痕)
 - 11 硬化灰褐色土
 - 12 固結火山灰粒混入暗褐色土(中世)
 - 13 固結火山灰粒混入黒褐色土
 - 14 ローム混入褐色土
 - 15 ロームブロック混入暗褐色土

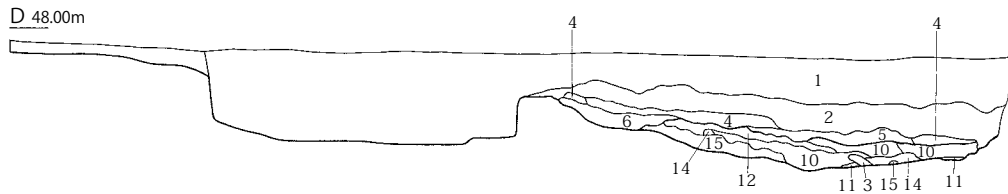
B 47.80m



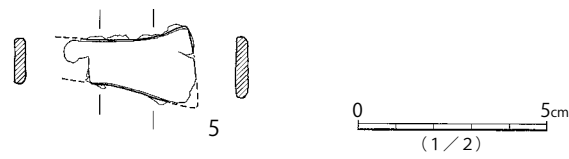
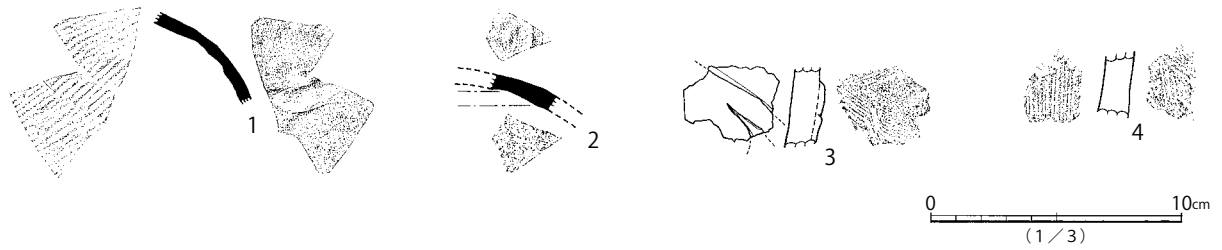
C 48.20m



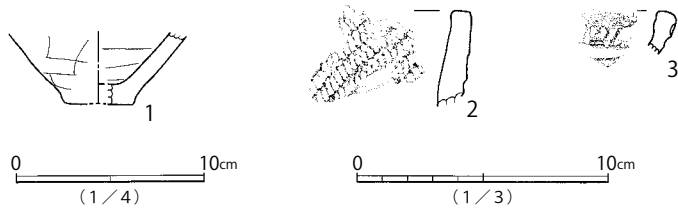
D 48.00m



0 3m
(1/100)



第25図 25号遺構実測図及び出土遺物実測図



第26図 その他一括出土遺物実測図

ピットや土坑に切られている。主軸方位はN-66°-Wを示し、検出した幅は9.70m、深さは1.35mである。遺構の未調査部分を含んだ復元全体幅は約12mと推定している。底面はピットや数条の溝が存在する。主な覆土は、12・13層が固結火山灰粒混入暗灰褐色土と黒褐色土、10・11層は硬化灰色土と灰褐色土で轍痕が見られ(第23図)、6層は宝永火山灰(1707年)とローム粒混入灰褐色土である。轍痕のある10・11層は、6層より下層に存在し厚く堆積しており、近世初めから中世末までの時期を推定した。6層から上層は近世以降と考えられる。出土遺物(第25図、PL. 13)は、遺構に関連する遺物は認められず、1・2は須恵器で1は甕胴部片、2は壺胴部片、3は形象埴輪片、4は円筒埴輪片である。5は細長い台形状の板状不明鉄片である。

その他一括出土遺物

出土遺物(第26図、PL. 9・13)1は、弥生土器壺底部片、2・3は後期の縄文土器片である。

第2表 挿図掲載外の遺物量

遺構名等	種類	重量(g)	遺構名等	種類	重量(g)	遺構名等	種類	重量(g)	遺構名等	種類	重量(g)	遺構名等	種類	重量(g)
2号	縄文土器	2.3	11号	縄文土器	11.4	13号	縄文土器	212.0	15号	弥生土器	5.2	25号	縄文土器	10.8
	弥生土器	4.4		弥生土器	817.0		弥生土器	20.8		弥生土器	15.8		弥生土器	50.4
3号	縄文土器	17.1		土師器	112.0	礫	412.1	22号	弥生土器	15.2	礫	51.3		
10号	縄文土器	41.4	12号	礫	472.2	14号	縄文土器	501.0	24号	縄文土器	45.7	全体一括	縄文土器	143.7
	弥生土器	13.9		縄文土器	6.4		弥生土器	1691.0		弥生土器	77.8		弥生土器	106.5
	焼礫	220.0		弥生土器	9.9		土師器	90.0		土師器	99.8		礫	483.5
	礫	2891.7					礫	300.0		礫	472.1			
							黒曜石	9.8						

4 まとめ

本書では、六孫王原遺跡G区1,137㎡についての本調査成果を記載した。

検出した遺構は、縄文時代早期後半の炉穴9基、竪穴建物跡が弥生時代後期2軒、終末期1軒、弥生時代後期から終末期の方形周溝墓3基(1基は拡張)、土壙墓7基、土坑1基、古墳時代中期の円墳(円形周溝)1基、中世の道路状遺構1条を検出した。

当遺跡の過去の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物跡88軒、方形周溝墓17基、土壙墓6基、円形周溝2基、道路状遺構3条などが調査されている。当遺跡の北西側に隣接する毛尻遺跡では、弥生時代後期の方形周溝墓4基、竪穴建物跡18軒、当遺跡の北側に位置する原遺跡では、22軒の弥生時代後期の竪穴建物跡などが調査されている。姉崎天神山古墳に近接し当遺跡の北側約1kmの姉崎東原遺跡では、弥生時代から古墳時代後期の約20軒の竪穴建物跡、方形周溝墓1基、円墳2基、前方後方墳1基を検出している。当台地西側先端部の姉崎宮山遺跡でも弥生時代から古墳時代の竪穴建物跡が調査されており、当遺跡の立地する周辺の台地上には弥生時代後期から古墳時代に至る集落や墳墓が連綿と数多く営まれている。

今回の調査でも同じ様相が見られ、竪穴建物跡は弥生時代後期の遺構3軒を調査した。時期は少量の出土遺物や遺構の形体から10・12号遺構は弥生時代後期後半の山田橋式、11号遺構は終末期頃の中台2式(大村2009)と推定される。10号遺構出土の板状鉄片は、A区68号B住居跡(古墳時代前期草刈式)出土の五角形状鉄板より一回り小さいが、一方が曲がった形体に似ている。しかし用途は不明である。

方形周溝墓は3基検出した。13号遺構は、D区の過去の調査と併せた結果、全体プランが判明した。四隅開口形で一部に盛土が残っている例である。埋葬施設は検出できなかったが、未調査部分のD区とG区間に存在した可能性も否定できない。出土遺物は、D区と併せても少量で、時期を特定できる遺物は無かった。当遺構の時期は形体などから後期後半の所産と考えられる。

14・15号遺構は、当初14号遺構が構築され、埋葬施設は20号遺構(土壙墓)とみられる。その後、東側に15号遺構を設置し拡張している。埋葬施設は方台部中央(14号遺構東側溝の自然埋没後に設置)の17号遺構(土壙墓)と考えられる。14・15号遺構は、出土遺物から山田橋式から中台式の様相がみられる。

土壙墓は7基検出され、16号遺構は裏込めに粘土が使用されている。出土遺物に底面棺外から出土した鉄製直刃鎌片があるが、これは弥生時代終末期の所産と推定される貴重な例である。18号遺構は位置や主軸方位が14・15号遺構と近似しているため追葬と考えられる。方台部にある16・19号遺構や14・15号遺構の外側に位置する21・22号遺構も、それぞれが並列に近い位置関係にあり、14・15号遺構の追葬の可能性はある。

方形周溝墓と土壙墓は、14号遺構・20号遺構(埋葬施設)→14・15号遺構(拡張)・17号遺構(埋葬施設)→18号遺構(→16・19・21・22号遺構)の変遷を推定した。時期としては、弥生後期中葉から終末期の範疇である。

17号遺構(土壙墓)から出土した鉄釧は、先端部片と環状で2重に重なった破片の計2点が出土している。先端部片は、形体から2重に重なった破片の1段目と接続する可能性も考えられる。先端部片は、残存の長さ2.45cm、幅1.50cm、厚さ0.20cm、先端部は弧状で外側へ0.25cmほど折り返している。断面は幅の広い凸レンズ状である。2重に重なった破片は、2段目が1段目の外側に斜めに巻き付いている状態であり、螺旋状に巻き上げられた1個体と考えられる。両段とも全周の約3/4弱と外側2段目は上部がわずかに残存している。大きさは幅1.50cm(1段目)と1.80cm(2段目)、厚さ0.20cm、断面は幅の広い凸レンズ状、内径は5.00～5.80cmを測る。繊維状の付着物が2段目の外側や内側の一部に残存する。特に外側は単位が粗い編目状の繊維を確認できる。残存する繊維が釧に巻かれた布の繊維なのか、着ていた衣服の繊維が付着したものなのかについては不明である。両面の一部には黒い付着物が見られ一部は硬化している。分析は行っていないが、鉄の腐食を防ぐため漆を塗布している可能性も考えられる。本資料は部分的な残存ではあるが、形体は薄い板状で幅も広く断面が凸レンズ状を表わすことなどから、東京都北区田端西台通遺跡出土の鉄釧に類似し、「螺旋型鉄釧」に含まれると考えられる(牛山1996)(土屋2009)。

24号遺構の円墳(円形周溝)は、墳丘が確認できず埋葬施設も認められなかった。須恵器甕胴部小片とともに、わずか1点ではあるが完形の土師器杯が東側周溝の覆土中層から出土している。大きさは、器高5.40cm、口径13.30cm、丸底でわずかに内湾する。両面赤彩され丁寧な作りであり供献土器と考えられる。加茂遺跡A・B地点V期C(浅利2003)、御林跡遺跡VI期頃(木對2008)に該当すると思われる、5世紀後葉と推定される。当遺跡の円形周溝は、D区で大小2基検出されており当遺構を含めて3基となった。

道路状遺構は、遺跡の北側に位置し、南東から北西方向に走る。推定幅は約12mと考えられる。轍痕のある層は宝永火山灰(1707年)混入層の下層に厚く堆積し、中世末から近世初め頃の所産と推定しているが、時期を特定する遺物は出土していない。当道路状遺構はA区A4号溝状遺構とC区C1号溝状遺構に連結するものと考えられる。当遺構は台地北側を通り東側方面から式内社の姉埴神社方面に向かう道路として使用されていたと考えられる。出土した(第25図)3の形象埴輪片は小片であり、特徴は明確ではないが、近傍の原1号墳あるいは山倉1号墳出土品(小橋2004)と比較すると帯状表現が近似する。

縄文時代早期の炉穴は、条痕文系の土器片を少量出土し遺構の密度は薄い。毛尻遺跡や当遺跡の他区でも遺構は検出されていないが同期の土器片は多く出土しており、周辺に炉穴の密集地域が存在することが予想される。少量の土器片のみであるが、前期から晩期に至る縄文土器片の出土は、北側約1kmに

所在する姉崎台貝塚(鬼子母神貝塚)などとの関連も伺わせるものである。

今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代中期を中心とする遺構などが検出され、隣接のC・D区などと同様な遺跡の様相が当台地北側縁辺部まで延びていることが判明した。

なお、17号遺構出土鉄釧について、小田原市教育委員会土屋了介氏に御指導いただきましたことを、末尾ながら記して感謝申し上げます。

参考文献

- ・毛尻遺跡調査会1983『千葉県市原市毛尻遺跡発掘調査報告書』
- ・原遺跡調査会1984『原遺跡』
- ・(財)市原市文化財センター1991『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡』(財)市原市文化財センター調査報告書第40集
- ・(財)市原市文化財センター1993『市原市姉崎東原遺跡B地点』(財)市原市文化財センター調査報告書第51集
- ・(財)千葉県文化財センター1994『石揚遺跡－手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』千葉県文化財センター調査報告第255集
- ・忍澤成視1995「1遺跡の立地と環境」P1～4『市原市能満上小貝塚』(財)市原市文化財センター調査報告書 第55集(財)市原市文化財センター
- ・藤岡孝司1995「螺旋状鉄釧小考－東日本における腕輪の意味－」P201～224『千葉県文化財センター研究紀要16』(財)千葉県文化財センター
- ・牛山英昭1996「弥生時代鉄釧の一例」P117～127『考古学雑誌81-2』日本考古学会
- ・(財)市原市文化財センター1997『市原市姉崎六孫王原遺跡』(財)市原市文化財センター調査報告書第58集
- ・北区教育委員会1998「七社神社前遺跡Ⅱ」『北区埋蔵文化財調査報告第24集』
- ・大村直2003「古墳時代集落出土の鉄製品」P344～348『考古資料大観 第7巻 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品』小学館
- ・小橋健司2004「第3章 考察 第1節 山倉1号墳出土埴輪について」P185～208『市原市山倉古墳群』(財)市原市文化財センター調査報告書第85集 上総国分寺台遺跡調査報告XI (財)市原市文化財センター
- ・浅利幸一2005「第3節 各期の設定と集落変遷」P481～493『市原市加茂遺跡A・B地点』(財)市原市文化財センター調査報告書第94集 上総国分寺台遺跡調査報告書XV (財)市原市文化財センター
- ・櫻井敦史2005「第2節 加茂遺跡A・B地点の中世陶磁器群について」P471～480 以下同上
- ・木對和紀2008「第IV章 御林跡遺跡5世紀代の土器変遷」P538～558『市原市御林跡遺跡Ⅱ』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第5集 上総国分寺台遺跡調査報告XVⅢ 市原市教育委員会
- ・大村直2009「第4章総括 第1節南中台遺跡と周辺遺跡の土器編年」P299～335『市原市南中台遺跡・荒久遺跡A地点』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集 上総国分寺台遺跡調査報告XX 市原市教育委員会
- ・土屋了介2009「螺旋状鉄釧の基礎的研究－形態と数量的要素を中心に－」P157～172『日々の考古学2』東海大学文学部考古学研究室
- ・鶴岡英一2013「第5章総括 第2節堅穴建物の規模と平面形態」P563～573『市原市中台遺跡(本文編)』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第24集 上総国分寺台遺跡調査報告XXⅡ 市原市教育委員会
- ・国際文化財(株)2014『市原市海保地区遺跡群Ⅰ 海保西竹谷遺跡・海保小谷作遺跡・海保大塚遺跡』
- ・市原市教育委員会2015「六孫王原遺跡G区」『平成26年度市原市内遺跡発掘調査報告』

第3表 土器等観察表

図No	遺構No	取付方法	取上げNo	層位	種別	器種	口径	底径	底径残存	最大径	器高	胎土・含有物	施装	色調	調整等	
4 1	1号遺構	点上げ	8号1-2	焼土内	縄文	深鉢						砂粒、白色粒、雲母	織紐含む。			
4 2	2号遺構	点上げ	9号6	焼土内	縄文	深鉢						砂粒、白色粒、雲母	織紐含む。			
4 3	2号遺構	一括	9号8	焼土内	縄文	深鉢						砂粒、白色粒、雲母	織紐含む。			
4 4	2号遺構	点上げ	9号5	焼土内	縄文	深鉢						砂粒、白色粒、雲母	織紐含む。			
4 5	2号遺構	一括	9号3	焼土内	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
4 6	2号遺構	点上げ	9号4	焼土内	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
4 7	3号遺構	点上げ	10号4	焼土内	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
4 8	3号遺構	点上げ	10号7	焼土内	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
4 9	5号遺構	点上げ	12号7	焼土内	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
4 10	7号遺構	点上げ	10号13	焼土内	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
4 11	8号遺構	点上げ	10号1	焼土内	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
4 12	8号遺構	点上げ	10号3	焼土内	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
4 13	8号遺構	点上げ	10号12	焼土内	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
4 14	8号遺構	点上げ	10号8	焼土内	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
4 15	8号遺構	点上げ	10号9	焼土内	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
4 16	8号遺構	点上げ	10号11	焼土内	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
5 1	10号遺構	点上げ	3号9	覆土下層	弥生	高杯						白色粒、赤色粒	織紐含む。			
5 2	10号遺構	点上げ	3号8	覆土下層	弥生	高杯						白色粒、赤色粒	織紐含む。			
5 3	10号遺構	点上げ	3号3	覆土下層	弥生	甕						白色粒	織紐含む。			
5 4	10号遺構	一括	3号2-一括	覆土下層	弥生	甕		(5.0)				白色粒	織紐含む。			
5 6	10号遺構	点上げ	3号7	覆土	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、石英	織紐含む。			
5 7	10号遺構	点上げ	3号6	覆土	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
6 1	11号遺構	一括	4号1-一括	覆土	弥生	甕						砂粒、白色粒、雲母	織紐含む。			
6 2	11号遺構	点上げ	4号2	P1	弥生	甕						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
6 3	11号遺構	点上げ	4号7	覆土下層	弥生	甕						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
6 4	11号遺構	点上げ	4号22	覆土下層	弥生	甕						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
6 5	11号遺構	点上げ	4号16	覆土下層	弥生	甕	68	1/1				白色粒、赤色粒	織紐含む。			
6 6	11号遺構	点上げ	4号20	覆土下層	弥生	甕	(98)	1/8				白色粒	織紐含む。			
6 7	11号遺構	点上げ	4号4-5	床直	弥生	甕	(76)	1/3				白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
6 8	11号遺構	点上げ	4号21-33	床直	弥生	甕	131	1/1				白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
6 9	11号遺構	点上げ	4号1-一括・3-9・12・14・18-19・23	覆土下層	弥生	甕				(102)		白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
6 10	11号遺構	点上げ	4号24-25-29	覆土下層	弥生	甕	82	1/1	27.7			砂粒、白色粒、雲母	織紐含む。			
6 11	11号遺構	一括	4号1-一括	覆土	弥生	甕						砂粒、白色粒	織紐含む。			
6 12	11号遺構	一括	4号34-38-一括	覆土	弥生	甕	(144)	台部1/3				白色粒	織紐含む。			
7 13	11号遺構	点上げ	1号4-4号24	覆土下層	弥生	甕	(206)	1/3				白色粒、赤色粒	織紐含む。			
7 14	11号遺構	点上げ	1号3-4号26	覆土下層	弥生	甕	(197)	1/3	9.3	1/1	239	白色粒、赤色粒	織紐含む。			
7 15	11号遺構	点上げ	4号24	覆土下層	弥生	甕			94	1/2	(293)	白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
7 16	11号遺構	点上げ	4号17	覆土下層	縄文	深鉢						白色粒	織紐含む。			
7 17	11号遺構	一括	4号1-一括	覆土	縄文	深鉢						白色粒	織紐含む。			
9 1	12号遺構	点上げ	6号2-3	床直	弥生	甕						白色粒	織紐含む。			
9 2	12号遺構	一括	6号1-一括	覆土	弥生	甕						白色粒	織紐含む。			
9 3	12号遺構	一括	6号1-一括	覆土	弥生	甕						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
9 4	12号遺構	点上げ	6号1-一括・3	覆土	弥生	甕						白色粒	織紐含む。			
9 5	12号遺構	点上げ	6号4	覆土	弥生	甕						白色粒	織紐含む。			
9 6	12号遺構	点上げ	6号6-7	覆土	弥生	甕						白色粒	織紐含む。			
9 7	12号遺構	一括	6号1-一括	覆土	弥生	甕						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
11 1	13号遺構	点上げ	2号7	覆土	縄文	深鉢						砂粒、白色粒、雲母	織紐含む。			
11 2	13号遺構	点上げ	2号13	覆土	縄文	深鉢						砂粒、白色粒、雲母	織紐含む。			
11 3	13号遺構	点上げ	2号2	覆土	縄文	深鉢						砂粒、白色粒、雲母	織紐含む。			
11 4	13号遺構	点上げ	2号15	覆土	縄文	深鉢						白色粒	織紐含む。			
11 5	13号遺構	点上げ	2号5	覆土	縄文	深鉢						白色粒	織紐含む。			
11 6	13号遺構	一括	2号1-一括	覆土	縄文	深鉢						砂粒、白色粒	織紐含む。			
11 7	13号遺構	一括	2号1-一括	覆土	縄文	深鉢						白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			
14 1	14号遺構	点上げ	7号96-97-98・100・102・103・104・105・107・110・121・122・170-171・172・174-175-176-177-209	覆土上層	弥生	甕	172	82	9/10	(266)	332	白色粒、赤色粒、雲母	織紐含む。			外面口縁部斜線文(R1)、細文脈体による押捺、指ナデとヘラミミガキ、S字状結節文2段、羽状細文(R1・LR)、S字状結節文2段、ヘラミミガキ、ヘラミミガキ後指ナデ、指頭直、口縁部赤彩有り。



遺跡遠景（奥の台地上が遺跡、天神山古墳から南方向を望む）



調査前の状況（南西側付近を北東側から望む）



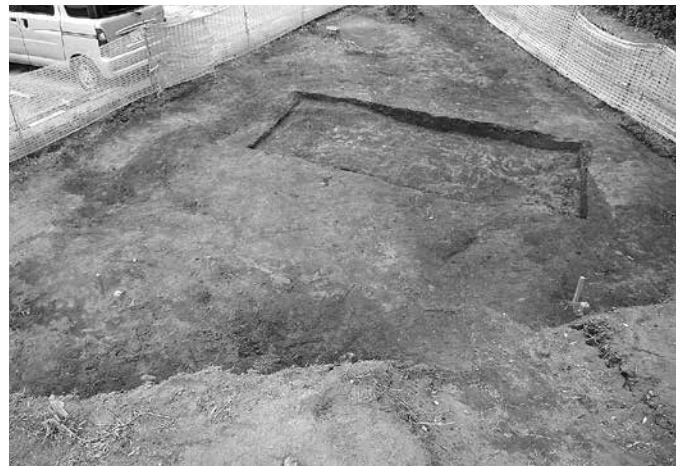
調査前の状況（北側）



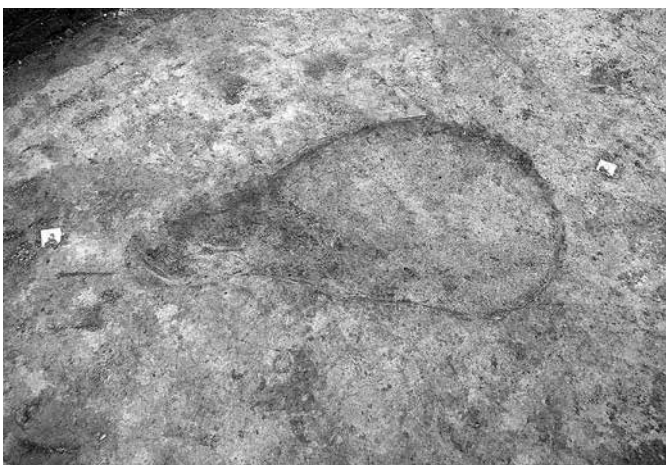
調査前の状況（北東側）



調査状況（南西側の遺構プラン検出）



調査状況（東側の遺構プラン検出）



1号遺構（北側から）



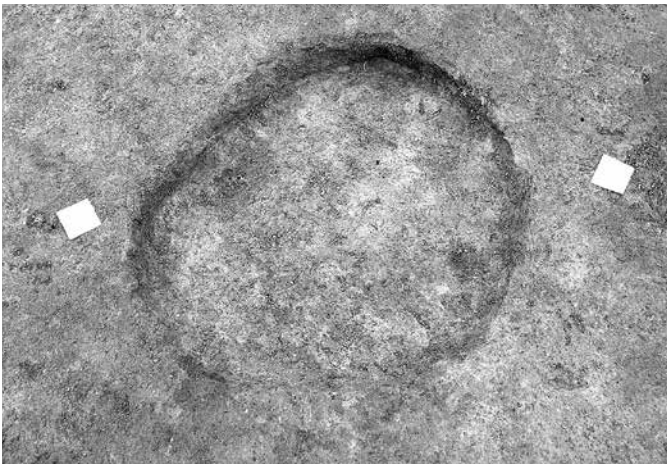
2号遺構（南東側から）



3・5～8号遺構（北東側から）



4号遺構（東側から）



9号遺構（南側から）



10号遺構（東側から）



11号遺構（南東側から）



11号遺構 遺物出土状況（北東側から）



11号遺構（南東側から）



12号遺構（東側から）



13号遺構 調査状況 (北西側から)



13号遺構 調査状況 (北西側から)



13号遺構 調査状況 (北東側から)



13号遺構 (北西側から)



13号遺構 盛土土層断面 (北西側から)



14・15号遺構付近プラン確認状況 (南側から)



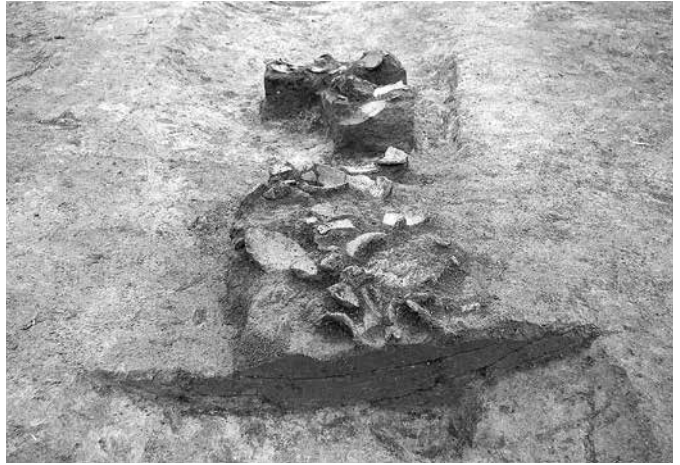
14・15号遺構 (南側から)



14・15号遺構 (北東側から)



14号遺構 (南東側から)



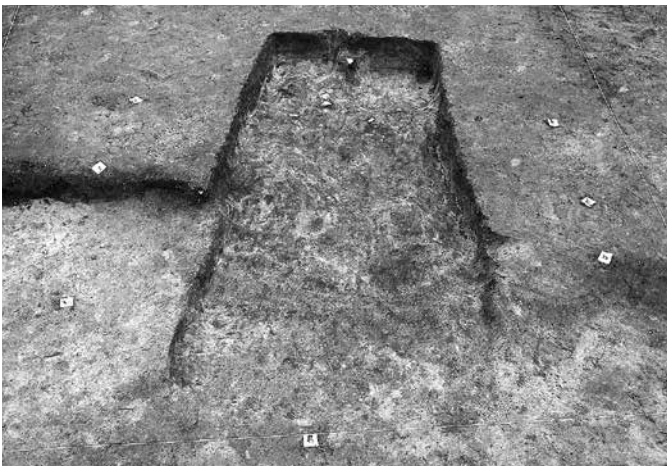
15号遺構 遺物出土状況



15号遺構 (南側から)



16号遺構 裏込め粘土残存状況 (東側から)



16号遺構 完掘状況 (東側から)



17号遺構 (西側から)



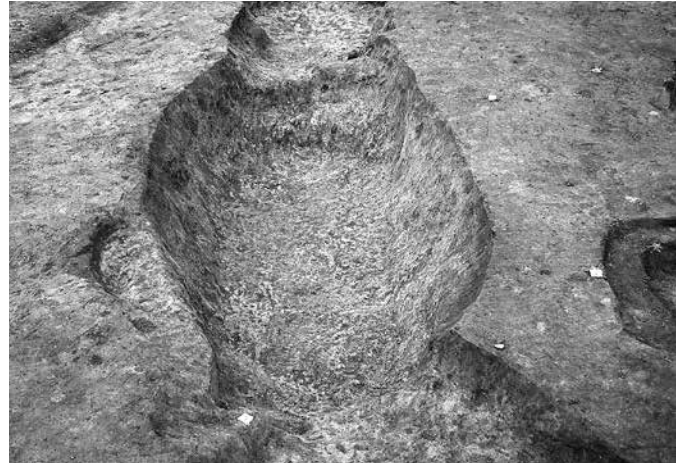
17号遺構 (東側から)



17号遺構 遺物出土状況 鉄釧 20図-11 (左)・10 (右)



17号遺構 鉄釧出土状況 (20図-11)



17号遺構 完掘状況 (南東側から)



18・19号遺構 (北東側から)、手前は15号遺構南側溝



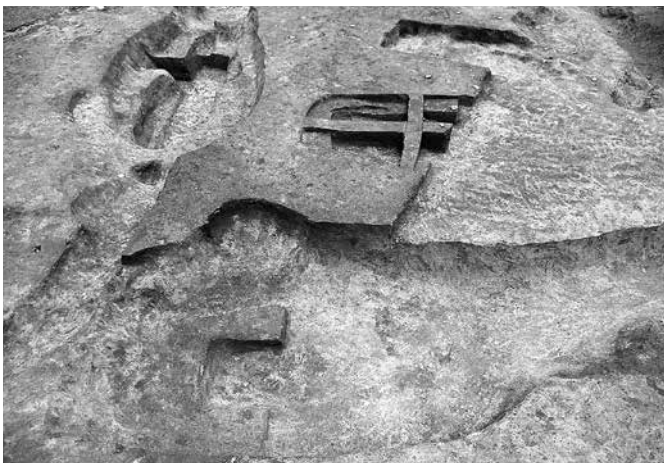
18号遺構 (南側から)



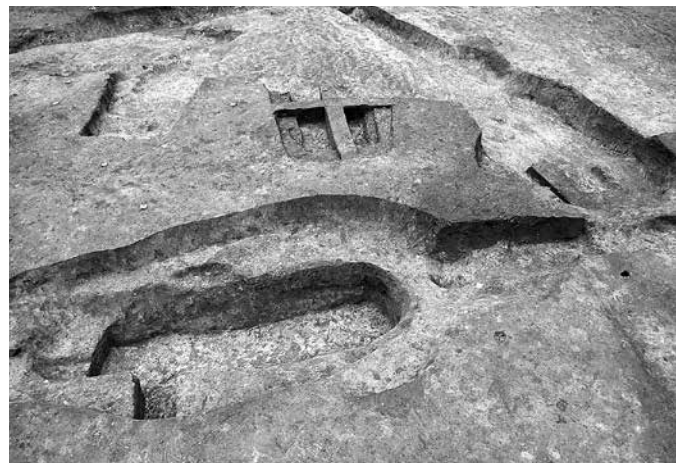
19号遺構 (東側から)



19号遺構 完掘状況 (東側から)



16~19号遺構周辺 (南側から)



16~19号遺構周辺 (西側から)



20号遺構（東側から）



20号遺構 完掘状況（東側から）



21号遺構（東側から）



21号遺構 完掘状況（東側から）



22号遺構（西側から）



23号遺構（南側から）



24号遺構 プラン確認状況（東側から）



24号遺構 完掘状況（東側から）



24号遺構 土師器杯出土状況



13号遺構から15号と24号遺構を望む（完掘状況）



25号遺構 中世面の状況（轍痕が認められた）



25号遺構（東側から）



25号遺構（南側から）



25号遺構 土層セクション（C-C'）



25号遺構（西側から）



25号遺構（北西側から）



11号遺構5 (第6図)



11号遺構6 (第6図)



11号遺構7 (第6図)



11号遺構8 (第6図)



11号遺構9 (第6図)



11号遺構10 (第6図)



11号遺構12 (第6図)



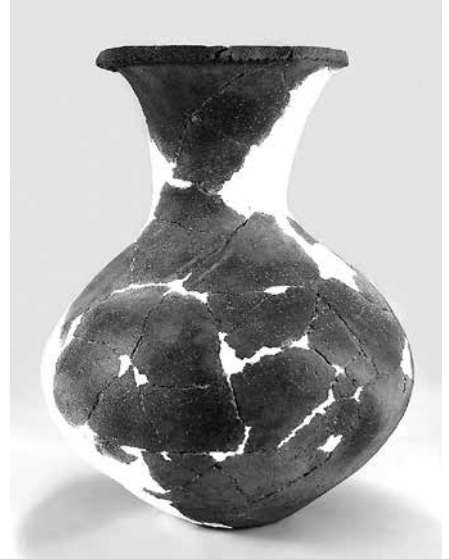
11号遺構13 (第7図)



11号遺構14 (第7図)



11号遺構15 (第7図)



14号遺構1 (第14図)



14号遺構2 (第14図)



14号遺構3 (第14図)



14号遺構4 (第14図)



14号遺構12 (第14図)



17号遺構9 (第20図)



14号遺構6 (第14図)



14号遺構13 (第14図)



18号遺構12 (第20図)



14号遺構7 (第14図)



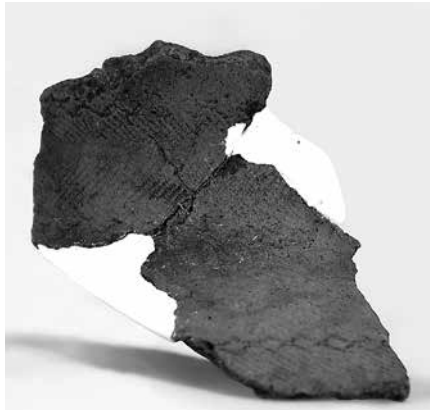
14号遺構14 (第14図)



18号遺構14 (第20図)



14号遺構8 (第14図)



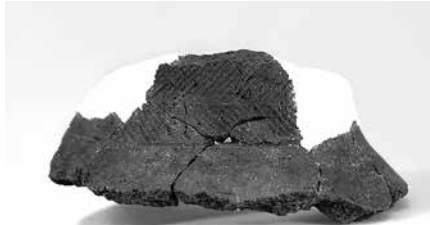
14号遺構15 (第15図)



21号遺構17 (第20図)



14号遺構10 (第14図)



14号遺構22 (第15図)



24号遺構2 (第22図)



14号遺構11 (第14図)



14・15号遺構一括3 (第17図)

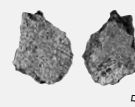


その他一括1 (第26図)

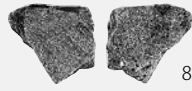
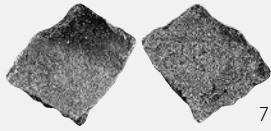
1号遺構 (第4図)



2号遺構 (第4図)



3号遺構 (第4図)



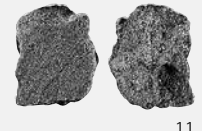
5号遺構 (第4図)



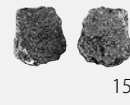
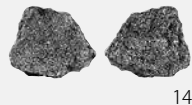
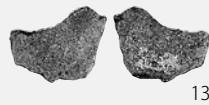
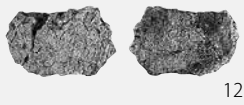
7号遺構 (第4図)



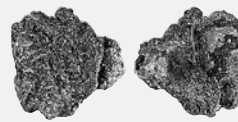
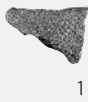
8号遺構 (第4図)



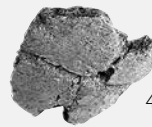
8号遺構 (第4図)



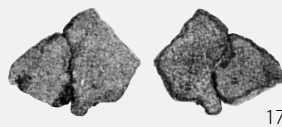
10号遺構 (第5図)



11号遺構 (第6図)



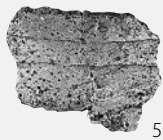
11号遺構 (第7図)



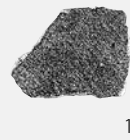
12号遺構 (第9図)



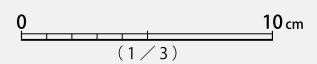
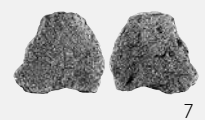
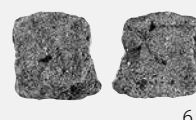
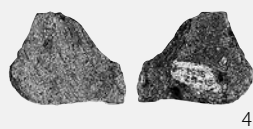
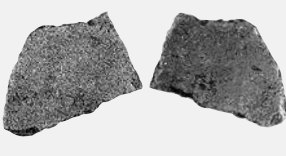
12号遺構 (第9図)



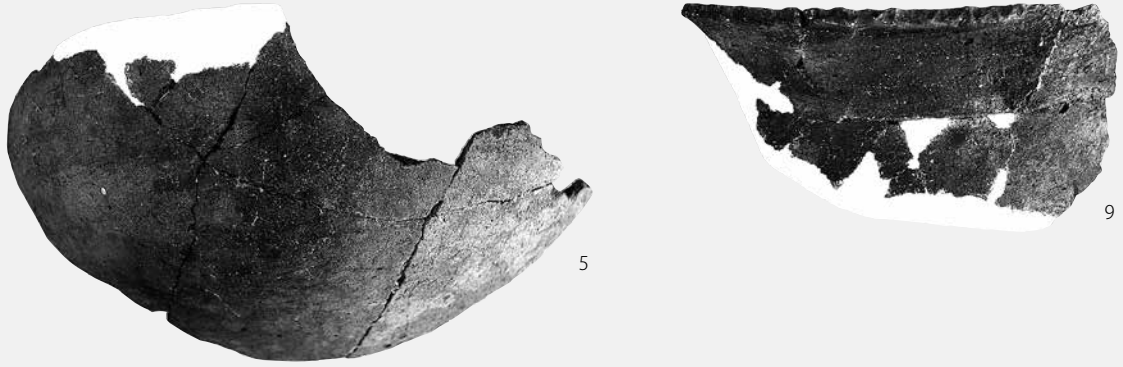
13号遺構 (第11図)



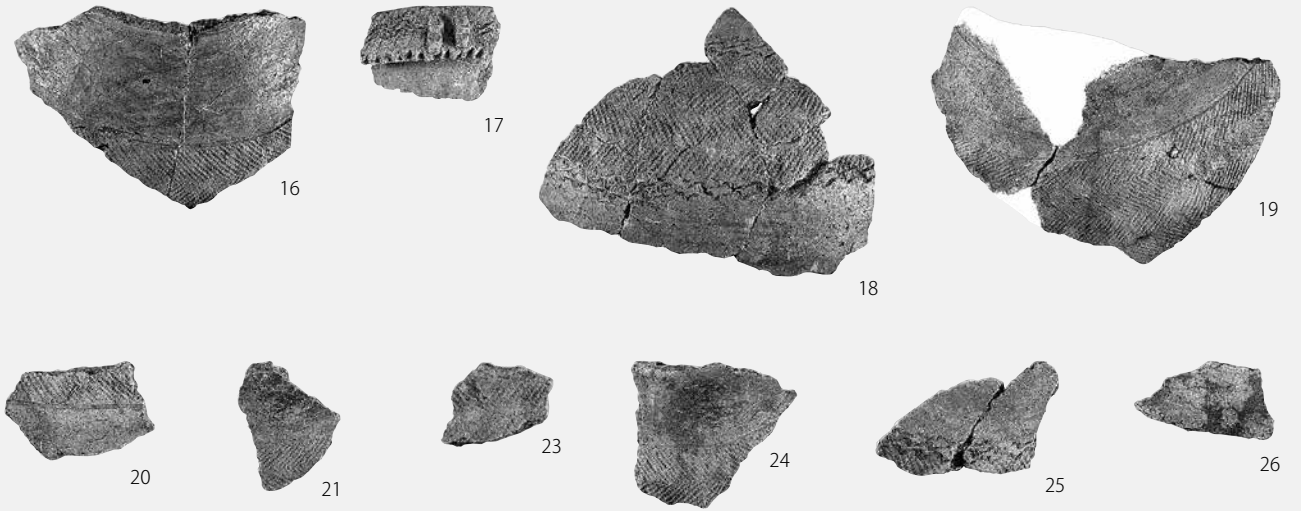
13号遺構 (第11図)



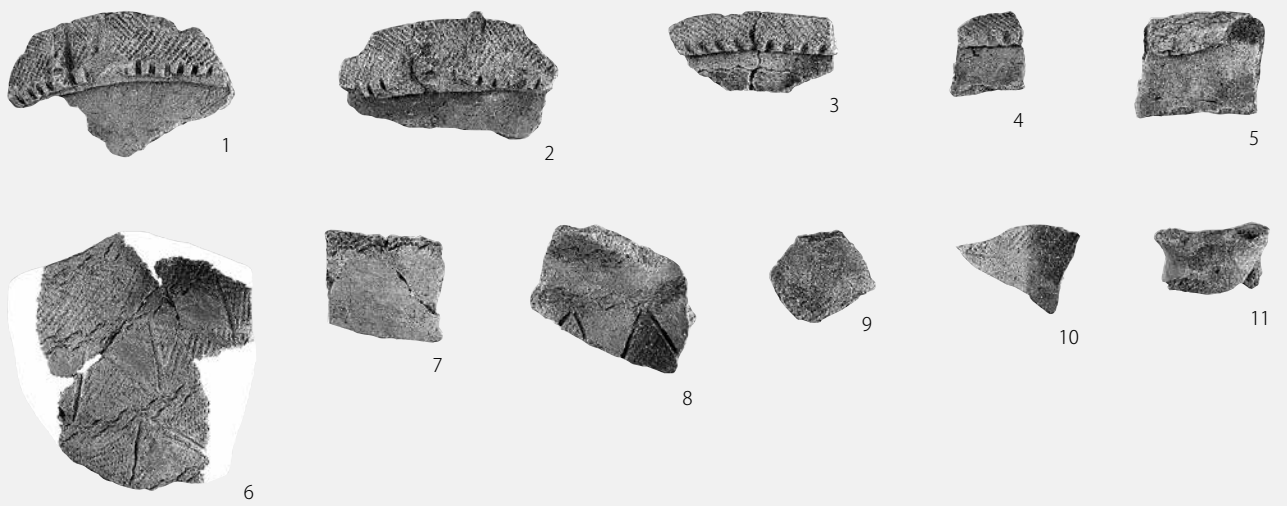
14号遺構 (第14図)



14号遺構 (第15図)



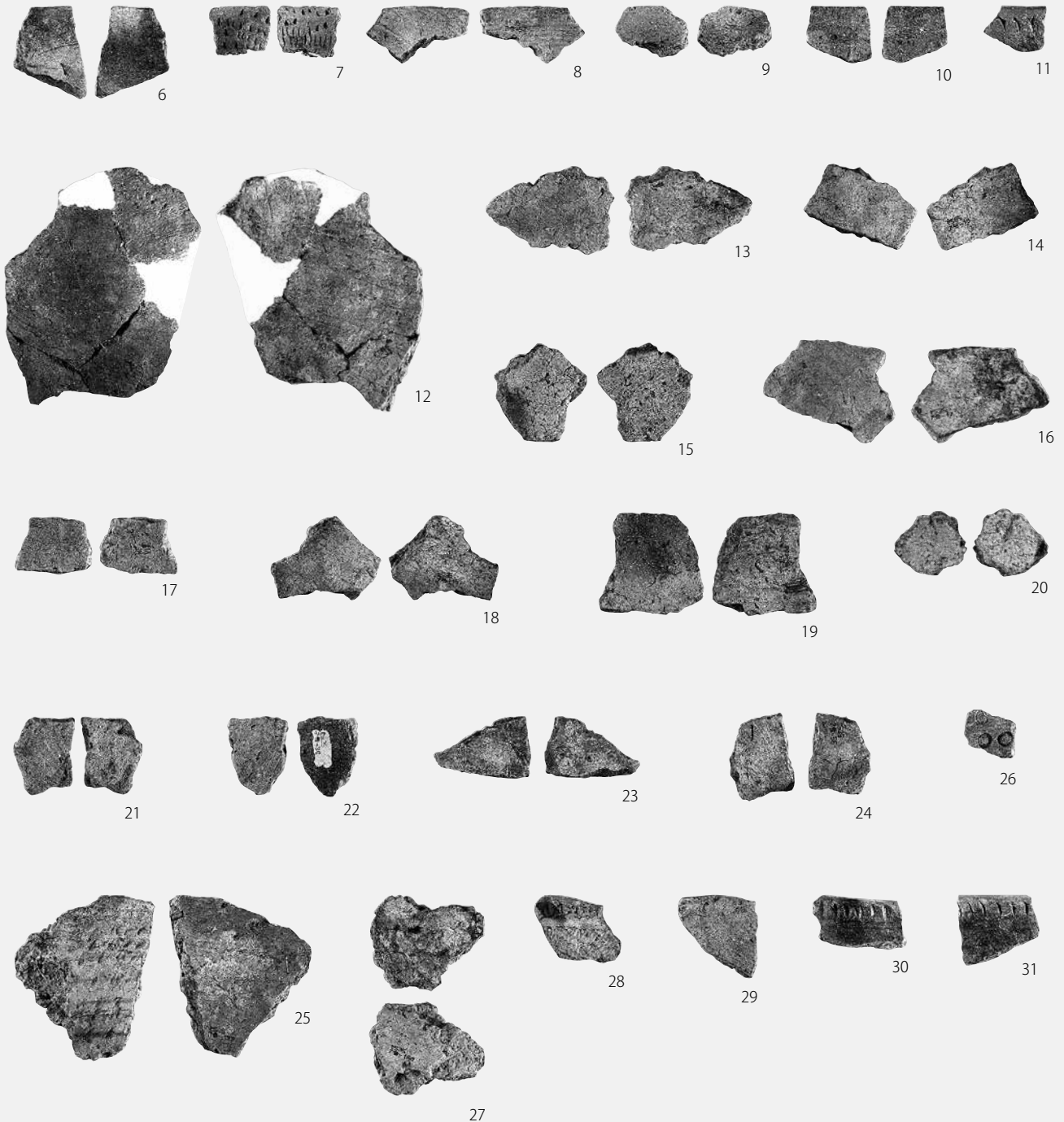
15号遺構 (第16図)



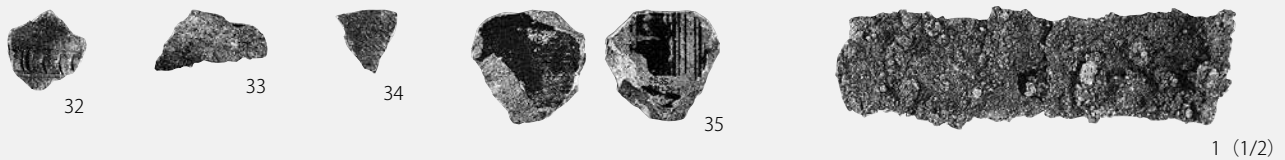
14・15号遺構一括 (第17図)



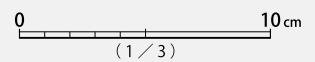
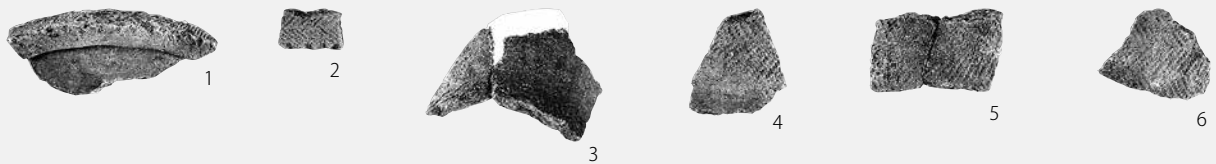
14・15号縄文土器 (第17図)



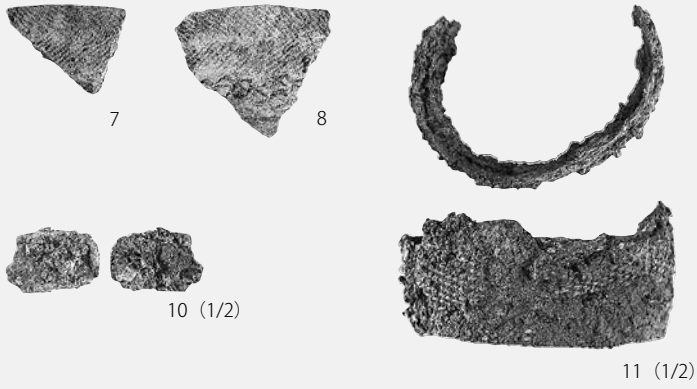
16号遺構 (第19図)



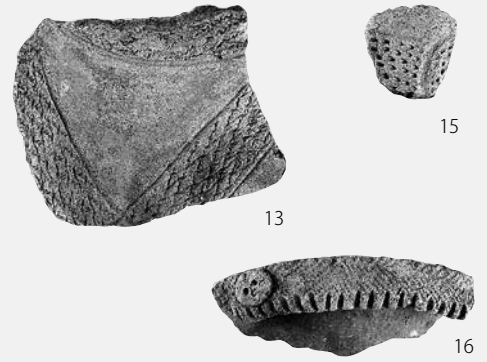
17号遺構 (第20図)



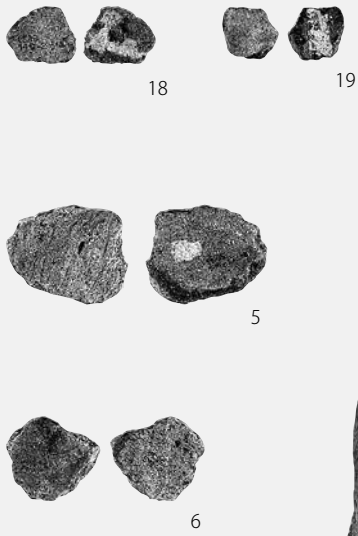
17号遺構 (第20図)



18号遺構 (第20図)



21号遺構 (第20図)



24号遺構 (第22図)



25号遺構 (第25図)



その他一括 (第26図)



報告書抄録

ふりがな	いちはらしろくそんのうばらいせきじーく							
書名	市原市六孫王原遺跡G区							
副書名								
巻次								
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第35集							
編著者名	田中清美							
編集機関	市原市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436 (41) 9000							
発行年月日	2016年3月17日							
所収遺跡名 <small>ふりがな</small>	所在地 <small>ふりがな</small>	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ろくそんのうばらいせき 六孫王原遺跡 じーく G区	いちはらしあねきあざろくそんのうばらい 市原市姉崎字六孫王原 ぼんいちぶ 3233番1の一部	12219	338	35度 27分 54秒	140度 03分 17秒	20150427 ～ 20150630	1,137㎡ 本調査	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
六孫王原遺跡 G区	包蔵地	縄文 弥生 古墳 中世	炉穴9基、竪穴建物跡3 軒、方形周溝墓3基、土 壙墓7基、土坑1基、円墳 1基、道路状遺構1条	縄文土器、弥生土器、土 師器、須恵器、中世陶器、 石器、鉄鎌、鉄釧、埴輪	縄文時代早期の炉穴群、弥生時代後 期から終末期の集落と墳墓、古墳時 代中期の円墳、中世の道路状遺構な どを検出した。 弥生時代の土壙墓から鉄鎌と鉄釧が 出土した。			
要約	六孫王原遺跡の北東側に位置するG区についての調査を実施した。検出した遺構は、弥生時代後期から終末期の竪穴建物跡と方形周溝墓、古墳時代中期の円墳及び中世の道路状遺構などである。弥生時代後期から終末期の拡張した方形周溝墓の検出や土壙墓から出土した鉄鎌と鉄釧は注目される。先に調査した隣接するB・C・D区と同様な遺構がG区まで延びていることが判明した。							

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第35集

市原市六孫王原遺跡G区

平成28年3月17日発行

編集 市原市埋蔵文化財調査センター
千葉県市原市能満1489番地
Tel 0436 (41) 9000

発行 千葉県市原市教育委員会
千葉県市原市国分寺台中央1-1-1
Tel 0436 (22) 1111

印刷 株式会社弘文社
千葉県市川市市川南2-7-2
Tel 047 (324) 5977